

Title	<羽田博士追悼録> 追悼記事
Author(s)	宮川, 尚志; 杉村, 勇造; 宇都宮, 清吉; 小畑, 龍雄; 小野, 勝年; 和田, 清; 杉本, 直治郎; 村上, 嘉實; 篤淵, 一; 細川, 護立; 長部, 和雄; 曾我部, 靜雄; 愛宕, 松男; 内藤, 戊申; 三上, 次男; 野上, 俊靜; 佐伯, 富; 藤田, 至善; 小野川, 秀美; 岡本, 午一; 外山, 軍治; 荒木, 敏一; 新村, 出; 菊池, 貞二; 羽田, 亨一; 淺野, 長武; 池内, 直; 武田, 長兵衛; 羽田, 明; 三島, 海雲; 上野, 精一; 徳田, 廣太郎; 佐藤, 長; 今西, 春秋; 慶松, 光雄; 岩井, 大慧; 黒田, 源次; 原田, 淑人; 今石, 二三雄; 若城, 久治郎; 大島, 利一; 内田, 吟風; 三田村, 泰助; 吉川, 幸次郎; 安部, 健夫; 日比野, 丈夫; 宮崎, 市定; 森, 鹿三; 塚本, 善隆; 田村, 實造; 増村, 宏; 梅原, 末治; 那波, 利貞; 田中, 克巳; 時野谷, 綾子
Citation	東洋史研究 (1955), 14(3): 4-75
Issue Date	1955-11-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/139043
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

羽田亨先生の思出

宮 川 尙 志

私が三高在學中、たしか記念祭の特別講演で同窓の先輩を招待してお話を聞いた時、羽田先生ともう一人、年若い化學者がそれぞれの専門を中心に解説的な講演をされた。羽田先生のお話でおぼえている一節は次の通りである。「私は東洋史をやっているが、東洋史という學問はどうも一般にいやがられて（笑聲）……一體東洋といってもシナがあり、インドあり、中央アジアなどもあり、はたして一の學問として體系づけられるかどうか、疑いを持たれることもある。しかしいまでは西域の研究が進み、はなればなれに見える諸民族の歴史の間に、實は密接な關係のあることが、特に佛教の傳播という大きな文化史的事實から明らかになって、もはや東洋史の成立可能を疑う者はなくなった。」

いよいよ東洋史をすることにきめて京大史學科に入って聞いた最初の講義がたまたま羽田先生の東洋史概説で、専ら宋

代史を一年にわたり講ぜられた。最初の時間に、「東洋史の見方は研究の未發達のため一定していないが、政治史的には南北民族の鬭争、文化史的には東西文物の交渉である」と述べられた。

二回生になって必修の特殊講義として聽いたのは東西交渉史であったが、前漢武帝前後から始まって、二學期では後漢の佛教東傳に關する研究であった。カニシカ王在位年代問題から王の傳道保護による後漢末以後の西域沙門の渡來の事實をあげられ、この部分は特に感銘を受けた。この講義の私の筆記ノートは留學生某君に貸したら、歸國の後、「全璧奉還」とか何とか、立派な禮狀までもらったが、ノートは何かの事故でまだ私にもとっていない。しかしいまでも私の研究していることは何かしら先生の教示に引かれていた様な氣がしてならない。

羽田先生の思い出

杉 村 勇 造

羽田先生はよく私に『あの時は』といわれた。それは昭和三年の秋、二人で天津に隱栖していた李盛鐸氏を訪問し、景教の安樂經を寫した時のことであった。誰れにも見せていないものを見せられたばかりでなく、書寫することを許されたので、先生は大喜び、私が御機嫌を損じないように老人と雑談している中に寫しとって後に研究刊行されたが、これには中國の學者達も呆然として驚いていたのだから、先生には得意な場面であったのである。

迅速で用意周到な先生の一面をこのとき目のあたり見せられて愈々私は先生に傾倒したのであるが、その前には北京での宴席で先生が巧みな話術で藝者を相手にされたのを見て、謹嚴な先生がその相手によって自らを引下げ千變萬化される人間の偉さに若い私は敬服したのであった。

私の北京での仕事は狩野先生の指導下に行つて來たのであるが、滿洲に移る前後からは主に羽田先生に相談した。ことに滿洲は内藤先生が關心を持っていられるので、先生が中心になり事が運ばれた。先生からの手紙は達筆でいつも長文であつた。事務的によく整理されているばかりでなく、情が籠っている。

平生人の爲に心を費していられるので、人の消息もよく書かれ、またよく語られた。先生ほど他方面の人物を知っている學者はなく、その専門々々によつて談論風發あくことを知らなかつた。ことに大陸關係の人物をよく知つて居られ、奇妙な人物も屢々口にされた。こうした面は狩野、内藤、矢野先生などとの交游から生れたものかも知れない。濱田先生とはまた異つた面である。

先生の親戚に時文を以ては梁啓超に匹敵すると中國人に謂われた名文家の菊池敖霜庵先生が居る。引揚げて來られてから暫く御一緒に生活していられたが、共に悠然として主客の別のない態度は、その頃こゝを訪れた私や黒田先生は、よく偉いものだと言ひ合ふのである。

羽田亨先生

宇 都 宮 清 吉

賢才に特有な顔。秀でたマユ、廣く高いヒタイ、美しく輝くヒトミ。強くはげしい心情をつける、キリツとむすばれた口。平凡で、やや短かいハナは、あまり美しいとはいえないが、かえつて、この人の滋味を現わして、やさしい、反省の人である一面を微光のように發散している。みじかくなりこんだ黒いカミは、おとろえを知らない活氣と鬪志とを、七十才というその肉體の上に輝かせていた……。

いつもスタイルに氣をくばる。どんな瞬間にも、決して自己をとり落さない。細心と方正と清潔と、そして斷乎たる勇氣をきざみ現わした男子像。私の一生に、幸いにもめぐり會った一人の教師！ 仰ぎ見た眞の教師！ 學問の、そしてまた人生の！

あのひどかった戦後の時期、人々がそれぞれに、おのれの弱點をさらけ出して恥をわすれていた時期、毎日自轉車をとばして、人文科學研究所に通勤した老所長さん、喪家の狗然としていた所員たちに、自ら無言のムチとなって勵まされたその勇氣！ そうした時期のある日、暑さと空腹にフラツいていた私をつかまえたかれ、さわやかな顔をちよつと左にかたむけ、ゆつたりと上體をそらした例のスキのないポーズ。なつかしい、あの魅力にみちた聲がひびいた。「どうだい！ 君はいつもスレンダーだねえ！」百萬言の慰問のことばにもまさる、その氣持ちのよい聲、そのニコやかな顔！ いまもわすれがたい。絶對にわすれられない！ なつかしい人、きびしい教師、仰ぎ見てつきぬ敬意をささげた人、ああ、それが羽田亭先生であつた。

思　い　出

小　畑　龍　雄

羽田先生といえば、こわかつたということがまっ先に來る。こわさにもいろいろあるが、先生のこわさは何でも知つていて黙つて見守つておられる眼のこわさである。

私が三回生の時、濱田先生急逝の後をうけて、先生が總長に就任された。その時は私たちの先生が總長になられたのだという嬉しさ誇らしさと演習半ばに先生が教壇を去られた淋しさとが入りまじつた。先生は演習の最初の課題として「兩

税法」を出された。レポート提出期限近くなっても書けないので、三回生一同相談して一週間の延期をお願いしようという事になったが、誰も進んで先生のところへ行こうという者が無い。「お前が大きいから」という理由で、私とその役を引受けさせられた。先生の研究室のドアをノックする時は胸がドキドキした。おそろおそろお願いしてみると、直ちに「よかろう、なかなかできないか」との御返事でホッとした。このレポートを提出した次の時間には、私たちが一部分ずつ発表し、先生が質問しつゝ批判を加えられたが、そのシンラツなること、私たちはたゞ拜謝するのみだった。私たちが調べて来たことと調べて来なかったことを先生は手にとることく知っておられたのだろう。

私は卒業のしばらく後に、東洋文庫の本を見たいと思って、岩井大慧氏宛の紹介状をいたゞくため總長室にうかがったことがある。總長室はいかめしくおそれ多いような感じがした。先生は何のためにどんな本を見たいのかと詳しくお尋ねになったが、後で秘書から渡された紹介状は便箋數枚にわたる長文のものであった。名刺に少し書いていたゞければと思っていた私は先生の周到な御配慮に感激した。最後に先生の私に對する皮肉を一つ。同窓のT君が先生を御宅に訪ねた時、「東洋史にセイの高いのはいないね」といわれたので、「藤枝さんや小畑がおります」と答えたところ、「小畑は高いんじゃない、あれは長いというんだ」とおっしゃったということである。

賢 師 劣 生

小 野 勝 年

羽田先生についての思出として、學問の上のことに關してはたゞザンキの一語につきる。學年試験に「天山南路について記せよ」という課題を出され、南路と南道の區別も出來ず、和蘭のことのみ述べた低能振りに對し、おなさけてどうや

ら通していたゞいたのがそもそものはじめ。東亞文化協議會に御出席のあり、北京の町で包みものを托され、それを洋車の上において用たしをしてに間に、車夫もろともに見失ひ、大騒ぎの末、やつと見つけ出したり、蒙疆旅行の同伴ではこちらが熱發して却って御迷惑をおかけするといった始末で、その他今でも冷汗をかくような傑作もあった。中國から引揚げてから職の心配をしていたゞいたり、病氣になつて入院の配慮を蒙るなど、私事のみ列擧するのは恐縮であるが、ことに肝に銘ずることの一は何時まで經つても一本立ちの出來ない愚劣な門生に専門の學を深むべきことの要をこんこんとおしえいませられたもうたことである。

義理固い人

和 田 清

羽田博士が學界の第一人者であつたばかりでなく、また政治的才幹にも勝れ、一代の名學部長、名總長であつたことは誰人も知る通りである。私は東京と京都とに分れていたが、羽田博士には不思議に知遇を得て、一方ならぬ御厄介になつたから、その想出は頗る多い。ここにその中、博士が最も義理固かつたことの一面を傳えて、博士を偲ぶ縁としたい。

明治の獨逸語學者として令名の高かつた山口小太郎氏が嘗て白鳥庫吉博士に向つて、「君が折角東洋史を開拓したが、一體その後繼者はあるかどうか」と聞いたら、白鳥博士は撫然として、「羽田亭というものがあつたが、今は京都へ行つて了つた」と答えられたということがある。それは丁度孔子が人に弟子のことを問われて、「顔回というものあり、今や亡し」と答えたという話に肖ているので、我々は多大の嫉妬を交えて、羽田博士のことを白門（白鳥門下）の顔回といふ慣わしたものである。ところがその顔回が師に事えるの道は實に行き届いたもので、四時に物を送つて先生の便宜を問われるだ

けでなく、東京へ来れば必ず先生を訪ねられたものだ。當時白鳥博士は東京の西郊の目黒の宿山に居られて、そこへ行くには烟塵蒙々たる練兵場を越えて行かなければならず、我々は西域と云って敬遠し中々行かなかつたものだが、羽田博士は必ずそこを訪われる。これには流石は顔回だと感心した。白鳥博士が生きていられる中はそれでも未だ張合いがあつたろうが、先生の死後も未だ訪ねられる。先生の墓は音羽の護國寺の西にあつて中々見つけ難いところだが、そこへお詣りした苦心談を聞かされる。側にいて一向お詣りをしない自分等は冷汗を流さざるを得ない。殊に先年羽田博士が文化勳章を拜受されるや、先づ第一に白鳥博士の墓前に報告謝意を表されたと聞くに至つては、誠に感激の外はない。

東洋文庫は故白鳥博士の遺業の一つである。それが戦後財政不如意になつて經營頗る振わない。それは羽田博士が最も心を傷められたことであつて、あらゆる援助を惜しまれなかつた。今度東洋文庫が文部省の補助を得るに至つたのも専ら羽田博士努力の結果である。博士は白鳥博士の晩年に東洋文庫の經營を委ねられたのを、京都にあつて辭退せられたので、それを苦に病んでの努力であるとも聞いている。羽田博士は斯くの如く人情に厚い義理固い人であつた。

羽田先生を偲びて

杉 本 直 治 郎

在外研究から歸つて、まだ間のないころ、

「ちよつと、立寄つてほしい。君に、頼みたいことがあるから。」

と、先生から、たよりを受けたわたくしは、どんなことかと、お宅へ伺つてみると、

「こんど那波君が、パリへ行くことになつたのについて、謹直な同君のことだから、なにかと、心を碎いているので、

けっして心配しないよう、最近の向うの様子を知っている君から、直接、いろいろと、同君に話してもらいたい。」
ということであった。もとよりお役に立つほどのこともあるまいが、先生のご依頼でもあるので、すぐその足で、わたくしは百萬遍の那波先生のおすまいを訪ねたことがある。――

こうしたぐあいには、當の那波先生ご自身よりも、かえって先生の方が、蔭ながら、一そう心配しておられたことは事實である。先生が、平素一再ならず、わたくしたちにまで、

「那波君の健康を、もっとも心配しているヨ。」

と、お漏らしになったことともに、那波先生のごとき、高足に對してはもちろん、わたくしたちのごとき、數ならぬ末弟子に對してさえ、いかに念頭に置いていて下さったか、長い間には、かすかす、胸を打つものがあった。

わたくしが、先生にお目にかかった、その最後となったのは、昨年の秋、京都での東方學會のさいのこと。例のごとく、ご健康そうに、にこにこされて、出會いがしらに、

「わしも、こんなおじいさんになってしまったゾ――ときに、君の女弟子が、わしに取っては孫弟子になるはずだと、その手紙がふるっている。おじいさんは、孫がかわいいはずだから、孫弟子のいうことは、きつと聞き届けて下さるに違いない。どうぞわたしの主人の論文を、東方學に載せていただきたい。と、こういうのである。それは審査の結果、載せるようにしたヨ。君の弟子は、主人の尻をたたいて、書かしているのではないかネ。」

などと、冗談のうちにも、末弟子の、そのまた弟子の配遇者にまで、好意を示していただいた。その好々爺然たるお姿が、いまもいきいきと、印象に残っていて、お亡くなりになったなどは、どうしても思われなほほどである。

羽田先生を憶う

村 上 嘉 實

私が羽田先生の御講義を聴いたのは、昭和四年から七年の春までであった。當時先生は御年五十歳前で、ひたすら學問に没頭しておられた時であり、昭和四年には「中央亞細亞の探險とその意義」について御進講なされ、御專攻において内外に令名を轟かしておられた。その頃先生の御部屋は陳列館の玄關を入った右側にあり、長いテーブルの上にも西域出土の文書をひろげ、大きな擴大鏡が側に置かれてあり、又壁には詳細な西域地圖がかけられてあった。特殊講義は「西域の文明」について、複雑な史料及び研究の分析を試み、その中から歴史の考え方を教えられた。演習で私が課せられた問題は、シャヴァンヌとペリオ共著の *Un traité manichéen retrouvé en Chine, 1913.* を読んで、マニ教が中國で如何に受容されたかを知ることであり、別に卒業論文のためにドーソンの *Histoire des Mongols* を讀まなければならなくなり、フランス語を學んでいなかった私は、休暇中字書と首引でやったことを今はなつかしく思出でている。

先生に打解けて接する機會は少なかったが、卒業する時に謝恩會を開いて、一度ゆっくり御話をきいたことがある。その時矢野先生がシベリヤを通りバイカル湖の寒波を見て作られし短歌を吟せられると、羽田先生も興に乗じて同じく露國に行かれた時の歌を披露され、更にパリ御滞在中の數々の逸話を面白く語って下さった。

就職難の昭和七年に卒業した私は、何の目當もなく血氣に逸って單身滿洲に渡ったのであるが、その時先生は私の前途を憂慮されて數々鄭重な紹介狀を賜わった。その年先生は滿洲視察に來られ、奉天の御宿で連日連夜御警咳に接することが出來た。私は結局撫順中學校に奉職することになったが、再び學問に志して京都に歸ってきた時も、又先生から快く御承引を得て今日まで御教を受け研究を續けることが出來たことを、偏えに感謝するものである。

先生の横顔

——テニスと将棋を通して——

鴛 淵

先生がお若い時から自轉車を巧みに乗廻された事は周知の通りであるが、どれ位スポーツに興味を持たれたかは、終に知ることなく過ぎてしまった。併し自分としては唯一つテニスに關して先生の思い出があり、或は先生御自身スポーツに大なる興味を持って居られたのではないかと思うので、ここに記してみたい。それは今からすれば二十餘年の昔、陳列館の北側にまだコートのある頃で、先生が總長になられた時より少し前のことであつた。たしか秋の或る日の午後と思うが、「O君テニスをやろう」とのお言葉に、二度ばかり三四人の仲間と白球を打興じたのであつた。もと／＼自分もテニスは好きなこととて御相手出来たと思うが、今でも忘れ得ないのは、先生の打球がなか／＼にスピンのかかった球で、しかも相手の隙をみて積極的に打って來られたことであつて、ここにもよく先生の強い御性格の一面が伺われるのではないかと、懐かしく思い出されるのである。

又スポーツというと共に娛樂となるが、この方も殆んど承る機會がなかつた。併し右のテニスと同じ頃であつたらうか、偶々陳列館のあの汚い地下の小使室で御會ひした時、「将棋を指そう」とて、自ら将棋盤を持出して駒を並べられたが、その棋風たるや實に積極果敢、中央からどん／＼駒を進める所謂「攻め」の将棋であつて、自分としては徒らに防戦これ努めるのみで、立ち所に二敗したのであつた。これは全く先生の緻密にして用意周到、十分に駒の動きを讀んだ上に機敏に指されたものであり、ここにも先生が學的研究に於て徹底的に真相を追求された御態度と同様の事が伺われるのであつて、御性格の一端が滲み出て居るものと思う。今や先生既に亡し！過去の片々たる小事を懐しくも思い出して、先生を偲ぶよすがにするの寂しき、何にもたとえようのないのを悲しむのみである。

羽田博士の思い出

細川護立

羽田博士は狩野君山先生を介して知ったが、それがいつ頃であったか覚えていない。大正の末ヨーロッパに行く途次京都に立寄り、一日博士や狩野・濱田・澤村の諸氏と會合したが、其時イギリスの歸りにフランスに假寓して諸方を旅行されるならエリセーフ氏に會われるのがいと一致して推薦された。

お蔭でパリでは諸博物館や玄人のゆくレストランなどの氣分を心ゆくまで味わしてもらえた。その時にはペリオ、アックン博士等とも屢々パリで會い、またドイツではルコック博士に壁畫復原の話を數日に亘って聽いた。たゞイギリスのスタイン博士は當時印度に居られて會えなかつた。

その後スタイン博士は來遊され羽田博士の紹介で邸に來られたが、日光に行かれるという日で一時間の約束であつた。しかし私の所持する美術品や、ことに私がスタインの著書全部を所有しているのを見て大いに喜び、隨伴者の言葉を退けて日光行を中止して四時間も居られた。二三日たつて私は急にスタイン博士に會いたくなり京都まで出掛け、都ホテルで三人鼎座して語合つたことは今日に至つても楽しい思い出である。そんなことから後日在印中のスタイン博士から博士を通じて色々の交渉もあつた。

羽田博士は外貌まことに溫厚であるが、一面に凛として冒すべからざるものがあつた。學究として苟もしいし、また事に當つて實行力のある點、他にその類を見ない人である。

京都の瓢亭で先生の専門の西域の交通路について一夜大いに論じ合ひ、互に一歩も譲らなかつたが、しかし二人とも實地を踏査したわけでもないので狩野先生が仲に入り晒い別れとなつたこともある。

帝室博物館が國立になつた時の館長、文化財の委員、京博の館長と戦後いろいろと私は推薦したが一度も受けず、しま

いには會う毎に『また何か言われるのか、申譯ないな』と喋って笑われた。先生の著書は少ないが、實事求是のほか句々に味があり、まことに名匠の藝術品のごとき珠玉の文字の羅列で、今は僅かにこれらの文章に博士を僞ぶことも寂しいことである。

鎮魂曲

長 部 和 雄

私の竹馬の友に貴志康一というヴァイオリニストがありました。君の嚴父彌右衛門氏と羽田先生とは昵懇の間柄であつたらしく、昭和六、七年の交かと思つたのでありますが、先生と對談中たまたま同君の噂が話題に上つたのでした。しかし、その後の消息を私は知らなかつたのです。ところが先生は「貴志康一が近く歸朝する。歸つて來たなら日本樂壇に花々しくデビューさせてやりたい。後援してやる積りだ」と話されたのを私は今でもハッキリ覚えています。君の日本樂壇に於ける最初の評判は餘り香ぐわしくなかつた様で、テクニクより抱えているヴァイオリンの方が素破らしいと蔭口が飛んだくらいでした。彼はその後健康を害し、間もなく大阪大學病院で死にました。まだ三十歳になつていなかったと思ひます。だからその道の専門家以外には、最早今日では彼の名前を覚えてゐる人は少なくなつて仕舞つています。君には獨奏家としてよりも作曲と指揮に轉向しかけていたらしく、獨逸ですでに向うの管絃樂團を指揮して好評を博したということが日本の新聞記事にも出ました。若くして夭折したのですから、彼は十分に藝を磨くまでに至らなかつたのも當然ですが、若し今姑らく長らえていたならば、よきパトロン羽田先生の庇護を得て猶お少しは我が樂壇に足跡を印したことでしよう。一昨年でしたか來朝したケンブがさようなら演奏に君の作品を取り上げたのを聴きまして、すぐさま羽田先生を想ひ、と

きすでに亡き貴志康一君の魂を招き、ひとり感慨に耽つたのでした。だのに先生も今はこの世の人ではありません。世界的な日本のオリエンタリストと獨逸のピアノリスト、それに薄命のヴァイオリニストを繞る物語を綴り、これを以て鎮魂曲といたします。

羽田先生と私

曾 我 部 靜 雄

私が大正十三年に京都大學の史學科に入學した時は、丁度先生は教授になられて初めて普通講義を御擔任になられた際であつた。その講義題目は宋時代であつて、五代の亂世の有様から説き起された。先生の御講義振りは非常に平易に話されるから、初心者の私達には非常によく判り、宋時代の概念を十分に修得することが出来た。北宋時代の所で時々王儼の東都事略を参考書としてあげられた。この書は史學科の研究室である陳列館の書庫に有つたから、私は借り出して暇々に讀んでいる内に、次第に宋に興味を感じるようになって、卒業論文も宋を取扱い、爾後今日に至るまで、私の研究は宋から離れ得ない状態にある。このように私の學徒としての運命の根本は、先ず以て先生の普通講義によつて拓かれたのである。

私は學恩を先生からうけただけでなく、私事についても、種々と御心配御指導に預り、かゝることについて恩師や先輩から貰つた手紙の數は、先生のが一番多いのではないかと思う。その内容は、いつも慈愛の溢れるものであつた。このよ
うなことは單に私だけでなく、先生の教を受けた者は、誰人も感じていることと思う。従つて先生の存在は、いつも私達にとつては後に在つて援護してくれる大きなものとして感ぜられていた。その先生が今や私達の居る現世から去り行かれ

たのであるから、學界の損失と言うような一般的な意味の外に、私達は大きき支柱を失ったと言う悲しみを痛切に感じているのである。

羽田先生の思い出

愛 宕 松 男

私が羽田先生と接觸する機會に恵まれたのは昭和七年、京都大學史學科に入學した時に始まります。その後、大學院學生あるいは文學部副手として東洋史研究室に籍を置くようになってから引續き今日に至るまで、學問的にも研究生活の上にも終始先生の御世話になって來ました。勿論、東北大學に移ってからというもの、そうでなくてさえ御無沙汰がちの私でしたから、休暇を利用して歸省する毎に精々年に二三度ぐらいしかお目にかゝりませんが、とに角先生に對する私の關係は微々たるものながら、思えばもう廿餘年も續いたことになる譯です。此の間を通じて、先生への回想はあれこれと仲々に盡きそうにもありませんが、私なりに強く印象づけられている先生は、几帳面で嚴格な反面、すこぶる溫情的だったという對照的な思い出に一貫されています。

この事を最も強く感じたのは、忘れもしない戰時中、吾々が東亞研究所の委託研究事業に従事していた時のことでした。會々滿洲國でソ滿國境の調査を行うことがあって、それに參加できる機會が私に與えられかけました。當時、私は露清外交關係を研究テーマとしていた關係上、大いに之を希望し、自分に與えられている研究にとつても決して矛盾するものではないという勝手な解釋の下に、之に應じようと思いました。然るに此の旨を先生の許に報告に行った私は、二年といふ限られた期間内に一應の成果を擧げた報告書を提出するという現實的な義務が、半年有餘の旅行の後、果して確實に

遂行しうるかどうかという鋭い尋問に全く自信を失い悄然として退出せざるを得ませんでした。所がその翌日、自分の短慮に思を致して右の計畫を断念しましたと更めて報告した時、先生から受けたものは昨日の酷しい叱責に反して、研究に關する懇切な指導や將來再び與えられぬとは限らない機會に就ての諄々たる諭しの言葉だったので。此の時ほど私は先生の嚴格さと慈味とを併せ感じたことはありません。

生來の迂闊さから、先生に報告すべき事柄を遅延したり或は前後したりすることが屢々だった私は、その都度よく御叱言を受けたものでしたが、後程には此の性格を見抜いて頂いたものか、時には笑を含みながら、

「もっと早く云って來なければいけないじゃないか」

と云われるに止まる程度になりました。しかし此の頃には、此の柔かい言葉の中にも、私は先生の嚴格さを聞くのが普通になっていました。

仙台に赴任してから、東北地方には未だ行つたことがないと仰言っていたので、必ず一度御足勞を御願ひする約束をしておきましたが、遂にそれを履行する暇がなかったのを今では最も残念に思っています。しかし之も例の迂闊さから等閑に附していたのでは決してなく、會我部教授とも相談して、近江中には非來て頂く心構えをしていたので、この點は何としても先生に知っておいて頂きたかったものでした。確かに、もっと早く中間報告をしておけば宜かったです。もっとも或いは先生には既に御承知下さっていたかも知れないという氣が、どこかでするようでもあるのですが。

夢にまで先生に叱られる話

内 藤 戊 申

先日私は御逝去後第一回目の先生の夢をみた。第一回目というのは、亡父の夢の回数から推計すると今後少くとも十回

やそこらは先生の夢を見なければならぬ計算になるのである。夢の中の先生はモーニング姿か何かで大きい自動車（多分
總長専用車だろう）のクッションに片膝を組んで名優の如く坐っておられた。あと數秒で自動車はスタートする。ヤレヤ
レと思ったとたんに「ボシン君はいるかね」と来る。萬事休す！ といった具合である。やはり推計によると、こういう
こわい夢が徐々にまったく徐々に懐しい夢に變化し終るまでには今後十五年以上はかゝることになる。

先生のこわさについては相當いゝ古されたが、そうかといってこれを省いて何か軽いエピソードだけをすました顔でい
つていては、やはりうそになるの思うのである。

追悼文の参考書として濱田先生追悼録を出してみた。意外な發見は、その中で羽田先生の一文がピカ一なのだ。（兩先
生の違いはマとネかと思つていたのに實はTとKであつたことなどこの一文ではじめて知つた次第である―三九二頁參
照）そこで思い出したのは先生の毒舌とユーモアについてである。所は恭仁山莊の座敷、先生と私の父とのさしたと
思う。話題は狩野先生が年のせいで朝眼が早くさめて困るという話。先生は狩野先生が早起きしすぎてウロ／＼される有
様を一流の漫畫家の手腕で描寫される。私の父はそれを聞いて涙を流さんばかりに笑つてゐる。ディテールは忘れたが、
結局、「老人は老人らしく辛棒しておとなしく寝ていれはいゝのに」でやつとこの一幕はおさまつたようだった。それか
らものゝ二時間もたつて又聞き耳をたてゝみると毒舌と洪笑はまだ續いてゐる。いやはやどうもあきれたものだった。
親孝行したい頃には親は居すになると困ると思つて昨年私は勇を鼓して先生の御宅に參上した。その時の先生は孝行し
てもらうにはまだまだ御元氣すぎる、相變らずのこわい先生だった。そして結局それが最後になつてしまつた。

羽田先生の思い出

三 上 次 男

羽田先生にはじめてお目にかゝったのは大學の二年のときだから、もう四半世紀も昔のことになる。先生の郷里がわたくしの生地と近かったので、早くから郷黨の先達として尊敬を拂っていたが、従兄の紹介状をもち京大の研究室におたずねした時の先生の印象は、想像以上に端正峻厳でいまさらのように畏敬の念を新たにすることを覺えている。

このような感じは、その後もなかなか抜け去らなかったが、一度だけ比較的くつろがれた先生の姿を見たことがある。昭和十一年の六月、奉天に第二回の日滿文化協會の總會があつて、東京の伊東・岡野・白鳥・市村・池内・原田、京都の濱田・羽田の諸先生が一堂に會され、壯觀を呈したことがある。會がおわつて、伊東・岡野の二先生を除く他の東洋史組の諸大家は熱河承德の清帝の離宮を觀察にゆかれることになった。ちょうどその時、濱田先生を隊長として熱河赤峰の發掘調査にゆくわれわれも奉天にいたので、これ幸と、避暑山莊見物のお伴をすることにした。そのころは交通の不便なときで、承德までに二泊をかさね、宿もすいぶん汚なかつた。汽車のなかで、先生はよく池内先生や濱田先生と話しをしておられたが、謹嚴な碩學と思つていた三先生の口から毒舌・皮肉が飛びかうのを聞いて、度膽をぬかれた。しかしこれがかえつて羽田先生をわれわれに近い人らしく見せ、だいぶ親しい感を抱かせるようになった。

承德の宿につくと、どの先生もすっかりうちくつろがれ、夕食が終ると宿の女將の頼みで揮毫になつた。これは、いままだが相當たいへんな旅で、緊張がつゝいたのにひきかえ、承德ホテルが意外にとゞのつており、女中のサービスもよかつたので、陶然となられたせいであろう。

これは占めた、と思ひ、わたくし達もお願いした。池内先生は遂に最後まで頑として應じて下さらなかつたが、ほかのどの大先生も好々爺のような顔になつて、熱河三十六景中の一景の四字を一枚ずつ書いて下さつた。いや揮毫をなさらな

いという白鳥先生が「梨花伴月」のほか、もう一枚書いて下さったし、市村先生は君たちに苦勞をかけたからといわれて別に御自作の詩をかいて下さった。

羽田先生も、もちろん書いて下さりつゝあった。しかし仲々頂けないのである。一枚目は破りすて、二枚目は途中でやめられた。そうして、「うまく書けないから、歸ってから書いて送ってあげるよ」といって、ポイと筆を投げられた。かたすをのんで待っていた自分は先きにもらっていた女中さんたちがうらめしくなった。歸ってから何度か先生にお約束をいってお願いしようと思つたが、もうその時はどうしても切り出せず、まったく残念なことになってしまった。

羽田先生

野上俊静

昭和の初めごろから、三十年ちかくもなるながい間、ひとかたならぬ御指導、御庇護をいただいた小生には、先生への思い出——謹直な意志のお強い先生、こわかった先生、こわさのなかに慈愛にみちたあたたかさを包んでいられた先生——そうしたことが、そこはかとなく浮んでくるのであるが、さて筆をとるといふことになると、私としては、なんとしても、先生と大谷大學の關係を紹介しなければならぬように思う。

大正十一年、大谷大學が大學令による大學に昇格し、翌年、文學部諸講座の開設されるに當つては、先生は、東本願寺要路の人々と御親交のあつた關係からか、その企畫の相談に應ぜられたばかりでなく、自ら東洋史講座を主宰されることになつた。爾來、大谷大學に於ける先生の講義は、先生が總長になられるまで十數年の間つゞいた。きまつて、火曜日の午前中で、演習と西域史であり、時に概説の講義もあつたが、特に西域史には、佛教學專攻の學生も受講して、明快な御

講義に魅せられたものであった。

現在、大谷大學の圖書館に、東洋學關係の圖書が、一應揃っているのも、全く先生のお力添えによることであるし、また單に東洋史講座のみならず、關係諸學科の編成にも、絶えず學校當局の相談に應じて、陰に陽に御盡力くださったことは、今さら一々申し述べ得ないところである。戦局苛烈となった昭和十九年九月、學長に就任された故大谷瑩誠連枝が、まさき先生を訪問されて、大學というもののありかたについて、尋ねられ、お力添えを乞われたこともあったと承っている。

大谷大學が新制大學に移行し、大學院設置に際しても、さらに御配慮を賜っている。昨年は嚴寒の一月下旬、三日間の連続講義をこころよくおひき受けくださったました。今にして思えば、これが先生最後の御講筵であった次第である。

羽田先生の思い出

佐 伯 富

先生が指を手術して京大病院に入院して居られた時のことであった。病室で待っていると朝の散歩から歸られた先生は、人なっこい笑みをたゞえながら「やあ」といつて這入って來られた。その時お見舞に行つた私は先生から私自身の健康状態をたずねられ却つて恐縮した。先生が京大教授として御在職中は職務上うち寛ろぐお暇があまりなかったせいも先生のこのような笑顔に接する機會はあまりなかったが、晩年の先生は人が變つたような人なつこい先生であった。先生の方から色々話題を提供せられるようになったことも私には何だか忘れがたい。先生にお會いしていつもたずねられることは今何を研究しているかということであった。これは私だけに關することだけではなかった。他の門下生のことについても

よくたすねられた。私の知っていることについてお話しすると満足そうに聞いていられた。晩年の先生には門下生の研究業績が進捗するのを聞いたり見たりすることに殊に大きな歡びを感じて居られたようである。また門下生の健康についても屢々たすねられたが、御自身の體験からでもあろうか、京大病院に入院せられていた先生は「長生きをすると色々な病氣にも罹らなければならぬ」と弱氣の言葉をはかれたが、先生からこのような弱音を豫期しなかつた私には先生も年をとられたとやゝ淋しい思いをした。しかし、先生には老人にありがちな自分の意見を固守して人のいうことを聞きいれないという老人癖は少しもなかつた。また話されることも實に理路整然としていた。長命をせられて私達の研究を永く見守つ下さるだろうというのが私達の豫想でもあり、また希望でもあつた。しかし、先生は忽焉として逝かれた。「研究はどこまで捗つたかね」と笑みをふくみながら先生が研究室に入つて來られるような錯覺におそわれるのは私だけであろうか。

羽田先生の思い出

藤 田 至 善

私は先生の末弟で、ここに偉大な先生に關してその思い出を書くことは本當に不遜な氣持がするのですが、求められるまゝに一筆する次第です。昭和二年に京大に入學して東洋史を専攻することになってから、卒業後も八年間、色々御指導や御世話をして頂いたことを貧しい私としてこの上なく幸福であり、又恐縮にも思っています。卒業した年の七月、先生の御配慮によって後漢書索引の編纂をすることになりましたが、これは先生が當時東方文化學院京都研究所の理事として、細心で地味な索引事業を計畫されたためで、先生の學風に通ずるものがあると思つています。然し先生の餘りにも偉大なる學問については、高弟や先輩の人々が十分に語つて下さることで、貧しい私の如きものの語るところではありませ

ん。それで私は先生から頂いた日常生活の御教諭を一筆します。

私は生れつき孤獨で狷介な性格であります。先生はこの私の缺點を御心配下さって、私が和歌山縣に赴任した時に、わざわざ御手紙を下さって、日常生活に調和を保って、社交を正しくするようにと懇切に諭して下さいました。先生の學問が細心でよく調和されていたように、先生の日常生活もよく調和されていました。態度、服装、話し方、皆美しく調和を保っていました。それでこそ、學者として偉大であった先生は又大學總長としてもより偉大でありました。又私の如きが一年に一度か二度、年賀狀と暑中見舞を差上げますと、先生は即日御自身の筆で御返事を下さったのです。これは一度も缺けたことはありません。こんなところにも先生の日常の御生活が現われて、末弟として嬉しく思ったのです。今や先生は永眠されましたが、先生の残された學風と人格とは、高弟によって長く受け繼がれて、ますますその光を發することでしょう。先生もあの獨特な微笑でそれを眺めておられるでしょう。

羽田先生を偲ぶ

小 野 川 秀 美

餘りのご無沙汰をお詫び方々、先生のお宅に伺った。家内が入院少し前のことである。お元氣になられていたけれども、先生にはなおご静養中のことで、二階のお部屋に通された。入院のときには、知っている教授にも話しておこうと云われ、遠慮せずに折々やって来たまえとも云われた。溫情ある言葉に頭の下る思いがしたのは、昨日のこのように耳朶に強く残っている。私は卒業を一年延ばした。卒論の題目は、始め「韓非子の君主論」にする積りでいたが、後に「秦末漢初の亂」というのに變えた。ところが秦がどうして亡びたのか判らなくなり、不眠には悩まされ、遂に論文が書けなくなった。

家庭の事情も考えて、今年出るのがよければ、提出の期日を少し待ってやってもよいと、先生は云われた。蒙古の方面でもやろうかと思ひ出したのは、こんなところに動機があったのかも知れない。しかし題目に何を選んでよいか判らず、それからしばらく経って、恐る／＼先生をお訪ねした。題目は自分で決めるものだよと、先生はきめつけられた。困っている、ヒルトのものでも読んでみたまえと、ラードロフの突厥碑文の譯注に附載されている論文を指示して頂いた。卒論について指導を受けたのは、それだけであるが、薛延陁を題目に選んだのが、先生のご意向に協っていたかどうか、私は知らない。卒業して金史索引の仕事と與えて頂いた。金史の索引を採りながら、金史について何一つ物を書き得なかったことを、未だに残念に思っている。

先生の學問が最も圓熟した頃の講義を聞くことが出来たことを、私は幸福に思う。先生の講義が幾等か理解出来るようになったのは、卒業して一、二年経ってからである。殊に「東方に於けるソグド人の活動」・「中央アジアの文化」・「東西交渉史」の講義には、先生の犀利な考證と體系ある學風に、今更の如く襟を正して傾聽した。先生は單なる考證學者でもなければ、單なる言語學者でもない。考證と言語に裏付けされた見事な西域史の體系は、何人の追隨をも許さない。しかも先生の高材をもってして、獨自の圓熟した學風に達せられたのは、總長になられる前、ほぼ十年ほどのことではなかつたかと思われる。私は今では塞外史をやっていない。しかし先生の講義と著述によって培われた學問の態度は、なお胸中に刻みつけられている。始めて論文らしいものを雑誌に載せたとき、君のものは何を書いてあるのか、読んで行く途中で忘れたよ、と先生は云われた。次のときには、君のものは讀んだよと云われ、ただ一度だけ、あるものを書いたとき、まづはお賞めに預ったように思う。今やっている方面で、先生に莞爾と笑って頂ける風のものが、いつ出来ることか。幽明境を異にして、師を憶うや切である。

保 證 人

岡 本 午 一

羽田先生は、五月十三日の京都市民葬で、宮崎教授が言われた如く「恐い先生」であった。私も他の先輩同僚の諸氏と同じく、先生の前では怖じけて、ものが言えなかった。然しその反面、人情味のある、やさしい先生であったことも事實である。數年前のこと、平素の御無沙汰のお詫びに伺ったとき、御不在であったので、少々の失望と一種の救われた喜びとの交錯した心持で歸った。ところが、其の夜先生から電話で「何の用か」と尋ねられて、大いに恐縮した。些細な事であるかもしれないが、此の電話の件は未だに私の心から消えない。

昭和二十二年の春であったと思う。私が京都府一女に勤めていた頃である。高等科二年の學級擔任として、偶々受持ちの生徒の家庭調査票を檢べていたことがあった。この學校は、京都の名門校として、知名の士の子女が澤山在學していたし、市の東北地域という事情もあって、京大關係者の家族も多く、私自身も恩師や知人のお嬢さんを教えたことも少くなかった。いま調査票を見ていると「羽田亨」という、私にとっては恐ろしく、また懐しい三字が眼に止まり、ハッと胸を衝かれた。それはHという生徒の保證人としてあった。研究室を離れ、先生の眼の餘り届かない所にいるのに、近くに監視されているような心配から、後日Hさんに、先生が保證人になられた理由を問うたところ、同嬢は三重縣に兩親が居り、市内在住の保證人を要したが、先生の御令息に姉が嫁いでいるので、自然そうなったということが判明した。そのうちHさんには何んだか一目おいているようであったが、その代り萬一にも事があつたら、今迄呼び付けられていた先生を保證人として學校へ喚んで——勿論先生は來られないであらうが——など、不遜な考えも起らないでもなかった。但しHさんは成績も良く温順しかつたので、無事に翌年の春卒業して、い、残念ながら私の此の大それた悲願は實現せず終つた。

羽田先生のこわさの根源

外 山 軍 治

羽田先生は、こわい先生であった。このこわさの根源について、われ／＼弟子どもはよく語り合った。そして、いつのまにか、それはわれ／＼が先生に生殺與奪の權をにぎられていたところにある、ということにきまってしまった。生殺與奪の權という大げさだが、それはこういうことである。私が東洋史を出たのは昭和八年であるが、その二年前から研究室には數名の卒業生がのこって研究に従事することになった。それへわれ／＼八年組も仲間入りしたわけで、一時あの部屋に十二名のものが机をならべたことがある。そのうち、大學から直接に俸給が出ているのは文學部助手の内田氏だけで、あとはすべて羽田先生が資金を都合してこられ研究費としてあてがわれたものである。卒業年次によって月額が定められ、昇給もしたし年末賞與もあった。その額は、われ／＼若いものがスポイルされないように考えてられるのだ、などぶえんりよな弟子どもがいったこともあるが、今日から考えると、よくまああれだけのことをして頂けたものだ、と全くありがたいことに思う。研究事業の期限がきれると、またつぎの事業と資金とを考へてこられ、給與のときれないように配慮せられたのである。生殺與奪の權とはすなわちこれで、先生がけっして生も奪もせられないことは知っていながら、随分けしからんことをいったものだ。

で、われ／＼は、先生のこわさの根源をこゝにあり、ときめていたのであるが、この考へは必ずしもあたらないことがわかった。というのは、先生とこのような關係におかれていない、たとえば東大の學友たちも、羽田先生はこわい、ねえという。學界以外の人でも、先生はこわいという。となると、生殺與奪、だけではすまされない。それで、その後いろいろ／＼ひとりりて考へてみたが、先生のこわさはどうやらもっと深いところから出てくるようだ、と氣がついた。それはどこからか、なか／＼うまく表現できないが、先生の人としての力からくる、こういっただら一番近いであろうか。今では先生のこわさ

が一番なつかしい。

太陽の様な羽田先生

荒 木 敏

謹厳な先生でした。講義もまた謹厳そのものでした。われ／＼を笑わされるといふようなことは滅多にありませんでした。だが、先生の時間は何時も満員でした。満州事變が起つて東亞の風雲が急を上げていた頃、異状なまでに高まつて來る東洋への關心の強さ。多くのすぐれた人たちが東洋史專攻を選んだのです。中には漫然と、卒業のとき、就職がいゝかも知れんと思つて東洋史を選んだ私のような不心得ものも、まじつてはいました。しかし卒業の時、日本はますます不景氣でした。入るとき史學科開關以來の入學難で、出るときはこれ亦、どん底のような就職難が待ちかまえていました。

卒業即ち失業というコースを危うく迎るべくあつた私を、羽田先生が助けて下さつたのです。囑託で京中へ、それから一工へ、また東方文化へ、この不心得ものを次々と世話して下さつたのです。三回生の時、父を失つた私は精神的に、物質的に、全くどん底だったので、そのどん底に大きな慈愛の手をさしのべて下さつたのが羽田先生なのでした。

そんなにお世話になりながら、卒業後、御無沙汰勝ちだったので。大學や樂友會館などで、なにかの時、ひよっくり先生に遇つて、ヒヤ／＼としてゐると「いよゝ、どうしてる」と気軽に聲を掛けて下さる。「ハッ元氣です」と聯隊長の前に出た二等兵みたいに、コチンコチンになつてもう一遍禮をするのが精一杯です。この頃から、謹嚴のみと思つていた先入感を變えざるを得ませんでした。「こわいがやさしい先生だ」と。出來るものも出來ないものも、同じ様に目をかけて下さつた大きな先生、それは太陽の慈愛の光にも似ています。秋霜烈日の如く我々に臨まれる一方、春の陽光のさんさんた

る如く、研究室を照し、我々を照らした先生は、また世界の東洋史學界に、高く燦然たる光を放つところの太陽で、同時にあったのです。宇宙には勿論、太陽は一つしかないですもの。

思出の一つ

新 村 出

滴翠翁の處女講演（明治四十三年秋、一九〇九）を史學研究會（京大文科講堂）で聞き、その同じ内容の補訂講演、しかも稀有なりし翁の最終講演の其の一つ（昭和二十八年早春）を京都博物館に聞き得た不思議な深縁、それが西域ならぬ南蠻關係であったことも、私一個にとっては、有り難い思出である。それは松の尾の慶政上人が福建省の泉州から將來して梅の尾の明恵上人に贈った南蠻文字の波斯詩であった。それについては、滴翠博士とは、しばしば語りあい、私もすでに十數年前、遠縁のつながる堀井梁歩の追憶文に、而も博士の厚意を得て、原文の寫眞を梁歩の在職した京城に送ってやったこともあった。

その波斯の四行詩二節中の第一節は、次のような、現下のわれわれの心境に適切極まる無常觀をうたったものである。それは、

喜びの世界は永くつづかない、

天は今日幸福を與えて明日それを奪去る、

世界は記憶ばかりだ、吾々は定離だ、

人間には尊い行蹟のほか何も残らない。

何とわれわれの今のヘートにかなしくひびくではないか。しかも、その文字、その文句、七百年の後、又半世紀すぎた今日、いたましくも、貴い業績が、かがやかしく世界の記憶にのこるばかりとなったとは、永久にくりかえされる眞理と
はいいながら、きょうは物こそかなしけれ、である。私編の松尾歌集（慶政上人和歌集）から抄録させていただきたい。
續古今集（卷九）の一首である。

めぐり逢ふ昔がたりの秋の月なぐさめかぬるわが心かな

詞書きには、「月の夜高辨上人（明惠）のもとにまかりて發心の初めのことなど互に申し侍りけるに、身まかりて後、そのかみの物がたり思ひ出でて、かの月日に當りける時、よみ侍りける」とある。この秋の月を想いやりつつ草す。

滴翠回顧

——燧人氏以前の人——

菊池貞二

彼は極めて理智的な男であった。學問の仕方も従ってサイエンチフィックだっと思いが、只一つ彼に取って甚だ不思議なことがある。

それは彼の徹底した温泉崇拜である。君は燧人氏以前の民だなど冷かしても、彼は甘受していた。満洲では湯崗子に、熊岳城に、よく温泉のお附合をした。一度などは嚴寒の熊岳城を二人で訪れたこともある。此處は到る處砂湯が出るので

有名、アンペラ一枚で北風を避けた砂原に、おんポロの百姓が缺て等身大の穴を掘り、やがて素裸になってそこに仰臥、一物をウキの如く浮かして眞冬に悠々一竿の風月を樂む。これこそ眞に燧人氏以前の民である。

彼は理智的であると共に、おしやれて氣取屋であつた。われらが痛飲淋漓、皿を叩いて「はねだとうるは二階から招く……」などと歌つても、恐らく彼は苦笑していたろう。一方ではデカダン趣味を相當理解した男だが、理智の制動機によつて、一生保身の道を誤らなかつた。偉い男である。

倫敦、前田ヶ谷、粟浦團公園町十八番地は吉野作造、三浦環以來の日本人下宿だが、主婦なる伊太利産のミセス、マツデンは美人でもあるが、口の悪い女で、濱田青陵氏を評してスキンニイ・フェッロー(骸骨先生)と云い、羽田をブック・ウォーム(書蠹)だと云つていた。併し Hanada, Haneda, Harada の三人 Ha-da は、多くの下宿人の中でも特別扱で、よく噂されたものだ。

二年の歐洲留學を、一年半程で切上げ奉天にやつて來た。彼地に行つて、自分は甚しくわが言語學の不備を痛感した、これから蒙古語をやり度いが、先生を世話して呉れと云われ、早速喇嘛僧の丹波喇布吉氏(お互の間では丹波ノ布吉)を推薦したが、それから二箇月間、彼は四十の手習に等しいこの勉強を熱心にやり出した。これなども普通のもの出來ぬ學究的熱意の現われである。

綾さんが初孫が出來た時、彼は大學總長になつた。「初メテ祖父トナリ總長トナル目出度クモアリ目出度クモナシ」と祝電を打つた。この總長は彼の學問の上ではマイナスであつた。かくてわが日本の學界は、經營の才に富んだ有能な一大學總長と引換に、唯彼のみに期待さるる貴重なライフ・ワークを永遠に失うてしまつた。

ラドロフは逝きぬ東に君ありと老博士等に仰がれて來よ

はなむけの言葉は知らず酒滿たせ杯擧げてただ行けという

彼の渡歐を送つた腰折數首の中の二首である。もうペリオやスタインと握手して御座るだろう。

おじいさんのこと

羽 田 亭 一

おと年の夏、おじいさんはぼくを相國寺のおじさんの所へつれて行って下さった。そのとき、ほんとうにわからなかったのか、じょうだんか、おじさんが「これはどこの子だね。」ときかれた。おじいちゃんはじまんそうに「これはわしのまごだ。」といわれた。

また、ある時には上加茂のゴルフ場に散歩につれていってもらって、いっしょに夏みかんをたべたこともある。西賀茂の今原へ散歩に行ったこともある。おと年のお正月のこと、ぼくはおじいちゃんが文化くんしょうのお祝にもらわれたでんちくをこわした。ぼくはおこられると思って、こわこわあやまりに行ったが、おじいちゃんはおこりもなさらないで、「もうすんだことだからよい。これから氣をつきなさい。」といわれただけだった。ぼくは心から「はい。」とへんじをした。今年三月、おじいちゃんは病院へはいられた。ある日、ぼくがお見まいに行くと、おじいちゃんは「亭一はおじいさんの大事なまごだからな。」といわれた。ぼくは氣をつけて聞いた。また次の日行くと、「もううちのさくらにはさいたか。おじいさんもさくらを見にかえろうな。」といわれた。ぼくはだいぶんよくなりましたと思っただけだった。それからしばらくしてまたおみまいに行った日には、もうぼくがわかっておられるのかどうかわからなかった。「亭一がきましたよ。」とおばあちゃんがいわれたら、ひくいこえて「ああ、ああ。」といわれただけだった。ぼくはかなしくなって、ろうかに出ると「わっ」となきだしてしまった。

羽田先生を悼む

淺 野 長 武

四日十三日の朝、羽田先生薨去の報に接した時は、まことに淋しい感じがした。先生の東洋史學を通じて學界に貢獻された偉大な功績については、今更述べるまでもない。その計は心から痛惜の念に堪えない。

私が初めて先生に親しくお話を伺う機會に恵まれたのは、今から十數年前、或る年の秋、京都南禪寺の細川邸での會合の折であつた。その時は、狩野直喜、新村出兩先生も同席されて、晚餐を共にしながら閑談した。先生は、日頃研究されている西域文化について、何かと平易にお話し下さつたことを記憶している。

月日は流れて昭和二十年、先生は貴族院議員に勅選され、計らずも貴族院で數々お目にかかるようになった。時恰も終戦の年のことゝて、世はとかく不安の念に驅られていた。その間先生は、常に學者として、極めて公正な立場から、時局に對せられたように思われた。

更に特筆せねばならぬことは、先生が東京國立博物館と、相當長い間、深い關係をもたれたことである。先生が公けに館務に參與されたのは、昭和十三年である。當時は、帝室博物館であつたが、先生は顧問を仰付けられた。その後、國立博物館となつてからも、昭和二十四年に評議員の職に就かれて、薨去の時に至つた。不肖私が、たまたま職を館に奉ずるに及び、特に公私共に先生の教示を蒙ることが多かつた。先生は、上京される毎によく館に立寄られ、來館されば、必ず私を訪ねて下さつた。評議員會その他に於いて、懇ろにわれわれを指導された厚恩を、私は忘れることが出来ない。われわれは、協力一致、今後一層館務に精勵することこそ、先生に對する報恩の一端ともなう。溫顔に微笑を湛えながら、諄々と語られる先生の容姿は、いつまでも私の腦裡に残ることであらう。こゝに謹んで御冥福を祈る。

羽田さんの思い出

池 内 直

羽田さんが亡くなられてもう二ヶ月餘になる。それなのに毎月十三日が來るといまだに玄關のベルが鳴りはしないかと、聞耳を立てる。學士院の例會に御上京の羽田さんは大抵十三日頃に訪ねて下さる慣しだったからである。この慣しは池内の足かけ五年の病中はもとより、世を去って後も、つゞいていた。ベルが鳴って玄關を開けると、「よう」と、にこやかな顔ではいつて來られたのが、また耳に残り目に見える。

私が池内に嫁いで來て初めて羽田さんにお目にかかったのは明治四十五年だったかと思う。もし左様だったら、今年で四十四年の御交際だ。然しほんとお親しくなつたのは大正八年頃からだと思う。池内はいつも羽田君は仕事師、俺は紙屑屋、濱田君はその兩方と言って笑つていた程、それぞれの性格は違つていたようだ。しかもほんとに仲がよく、何事でもよく相談しあつて居られたようだった。滿洲國が出來、日滿文化協會が設立されてからは、三人で御一緒に滿洲方面に出かける機會も多かったが、或る時の旅行ではこんなこともあつたそうだ。朝、船室で服を着かけた池内が、常々身の廻りの事は人まかせの例のすぼらから、カラーが見つからず、一生懸命捜している、同室の羽田さんが、それを捜し出して下すつた。池内は「有つたかい有難う。どうりでゆうべ君が僕のカラーのサイズを聞いたと思つたよ。」と云つたとかで、其の後御上京の折、「奥さん、池内はひどい奴ですよ。僕を泥棒にしよつた。」と申されて大笑したことだった。とに角羽田さんと濱田さんと三人寄ると、よくもあゝ當意即妙な悪口が口を突いて出るものと感心したものだった。殊にペラペラ調の池内の悪口は、時に人をヘツとさせるような折も有つたが羽田さんはいつもにこにこしながら「ひどいことを言ひよる」と笑つて居られた。

昭和八年十月二十五日、池内が京大に講義に行った時、羽田御夫妻に招かれ、御家族の方々に親友の太田喜二郎氏、清

野謙次氏、それに濱田さんは御旅行中で夫人だけが加わられて茸狩に連れて行って頂いた。賑やかな楽しい集りだった。それが今は清野さんの他は濱田さんがまづ逝かれ、太田さんも、池内も、そして此の度は羽田さんまで相ついで永遠の旅に出てしまわれた。一番お元氣にお見うけした羽田さんがこんな早く世を去られようとは、ただ夢のようだ。殊に淋しいことである。

羽田先生と私

武 田 長 兵 衛

四月十三日の朝、私の最も尊敬する方の一人である羽田亨先生が逝去せられたという御通知をうけて今更ながら驚愕いたしました。

私が四月一日に病院へお見舞のため参上して、今回刊行された「飛鳥奈良時代の文化」のゲラ刷と圖版をお目にかけたところ、うって變つて衰弱せられた先生がニコリとお笑いになって、いかにも御満足のように拜察しました。平素の御元氣な先生を知っている私にとっては却って身につまされる思いでした。しかし種々の都合で先生の御在世中に完成し得なかったことは誠に残念であります。

私が先生を存じ上げるようになったのは二十餘年前、當時、私の父が本草醫書を蒐集している關係で、父の使者として先生の御意見をお伺いに参ったことが機縁となつて、私の心にふれる先生の人間味というようなものが、その後屢々上加茂のお宅に私を引きよせるようになったのであります。山端の平八とか、南禪寺の瓢亭にお供をしたり、時には先生のお宅で奥様のお酌で御馳走になったり、酔が廻るにつれ、私勝手の氣焔を吐いたり、議論を持ちかけて、先生を困らせたり、

笑わせたりしたことも再々ならずでありました。この時にも先生は難かしい顔もせず、つまらない私の話にも相槌を打ったり、又興味深い御意見をきかせていたゞくのでした。

私が初めて満洲へ行くので、先生に御挨拶に参上した節「鶏冠壺をさがして來給え」といわれて家に歸って父に話しますと、「羽田先生がおっしゃるのであれば大變貴重な、高價なものだろう。しかし一體それはどんなものか」と問われて、初めてそれをきいてくるのを忘れたのに氣附いて又御宅へお伺いに出たことがありました。先生に實は斯様々と申し上げると、いつもの落着いた調子で「この周章者の小僧奴が」といわぬばかりに笑いながら、本箱の上にあった緑釉の壺をおとりになって、「これだよ、心配することはないよ」と。これが、私が遼・金時代の出土品を拜見したそもその初めてありました。

昭和十八年、私が應召から歸って家を繼いだ頃、私の座右銘として何か書いていたゞきたいとお願いしておいたところ、新春になって持参していたゞいた乾隆の紅色の紙に「不知言之人、烏可與言、知言之人、默焉而其意已傳、云々」といふ韓退之の言箴が書かれてありました。察するところ當時の世相を慨嘆したり、我儘勝手な議論をしている青二才の私を戒められたもので、寡言實行に努力することが、先生の意にそう所以であると、常に心している次第であります。

この様に書いていると先生についての數々の想い出が走馬燈のように泛んできて盡きません。最後に先生の御冥福を祈って擱筆いたします。

父を偲ぶ

羽田 明

伯父の話によると、父は遅生まれで八つ上りのはずのところ、特別に七つで假入學を許され、そのまま小學校の課程を終つたばかりでなく、高等科卒業と同時に助教に採用されたという。いくら暢氣な明治二十年代のことであつたにしても、またいくら丹後の片田舎のことであつたにしても、子供のころから人なみ以上に頭が良かったことは本當であろう。最後の病床においてさえほとんど衰えもみせなかつた父の記憶力と理解力とは家族の者はもちろん、主治醫さえしばしば悩ませたのであつた。

助教生活一年で伯父を頼つて京都にでてきた父は編入試験を受けて一中の三年に入り、卒業後三高に進んだ。その受験準備中のことらしいが、早曉ランプを點けたまま机に凭れてうたゝ寝している父の姿をみつけた伯父が「それほどまでしなくても……。」と止めたのに答えて、父は「面白いからやっているだけだ。」といったという。生まれつき勉強家・努力家だつたにちがいない。そういえば、どんな原稿一つ書く場合でも、推敲に推敲を重ねていく日も深夜まで書齋に引き籠る父であつた。来る年も来る年も、蒸暑い京都の盛夏に、裸の肩に濡れ手拭をかけて終日机に向つていた父の姿も今なお眼底にある。

父は謹嚴で恐い先生だつたというのが定評である。事實、平素は煙たい父であつた。ただ、爾汝の交りを結んだ友人たちとの諧謔に満ちた應酬には日常の父を見なおさせるものがあつた。いな、日ごろの言動の端々や眼色に根は多感で愛情深かつた父の心を讀み取ることも實はそれほど困難だつたわけではない。ことに思はず洩す微笑には温い情愛がにじみ出ていた。郷黨、同窓に限らず、各方面に友人・知己が多かつたのも、孫たちから慕われたのもそのせいであろう。

自ら好んで父の歩んだ道を選びながら、齡不惑を越えてなお碌々たる不肖の子は、今はなき父をしのんでただ長嘆するばかりである。

羽田博士の思い出

三 島 海 雲

故羽田亨博士と私の交友はほとんど半世紀に近かったのですが、いまその間のことを回想してみても、じつに懐しさに堪えない次第です。

もちろん羽田博士は世に知られたる東洋史の權威であり、私はまた方面ちがいの食料關係の仕事をやってきたもので、普通から云えばすいぶんかけはなれた畑ちがいの人間同志ですが、奇妙に意氣投合したのは不思議な縁と云わずにはいられません。しかし、羽田博士の研究が中央アジアを對象とし、そこに文明發祥の歴史を探ろうとせられたこと、私が生涯の事業としている乳酸菌食品の源を蒙古に於て發見したこと、よく考えて見れば底の方に深いつながりがあったようにも思われます。

羽田博士の業績は中央アジアの研究が中心で話題もその方面に及ぶことがよくありましたが、幸い私もまた蒙古全土を歩きまわっていたので、そんな點では共に故郷のことをでも話すようによく話が合ったものです。そんなとき、よく博士は、「こと東洋史に關する限り日本はどここの國にもひけを取らないよ」と云っていました。

東京考古學會發會式で、旅順附近出土の古鏡に就て講演の直前、博士は私に「文字か、繪かわからないようなものでも僕が一月ほどじっと見ていると讀めてくるよ」と笑いながら云ったものです。天才的な學者というものは實に卒直で純粹なものです、博士のことを考えると彼もまたそんな人であったようです。

大谷光瑞師の新彊發掘物の年代鑑定をやったとき、「李伯頓首頓首」の李伯の身元を調べるのがなかなかの大仕事ごとでしたが、博士は心ひそかに東晋の人であろうと見當をつけ晋書を中頃から讀みはじめました。そしてある夜、遂に發見したのですが、その時には思はず机をドーンとたいて夫人を吃驚させたということ。ロンドン博物館で土耳其語の

古文書研究の際、英當局が寶庫の鍵を博士にまかせっきりにしたというので、日本の大使館の連中がびっくりしたということですが、それも博士の世俗的な點では無欲恬淡な篤學の士に相應しい人柄のせいに相違ありません。博士は貴族院議員になったとき國鐵のパスがもらえるということも知らないで一年半あまりも切符を買っていた。私が注意して「あゝそうか」とはじめて氣がついた、というほどの人です。

晩年は時々東京の往復に伊東の私の宿に寄って一日か二日心身をやすめてもらったのですが、そんなとき家内が茶目氣を出して競輪やパチンコに誘惑(家内もじつは初めて)して一度くらい一緒に行ったことがあります。これもいまとなればなつかしい思い出の一つです。

羽田先生を憶う

上野精一

羽田先生からいたゞいた手紙を一つ、私信ではありますがありますが發表することをおゆるし願いたい。

謹啓 昨夜は遠路御多忙中を態々御出馬御厚志何とも難有いつまでも忘じ難き記念に御座候厚く御禮申上候御話の満和辭典一部拜呈申上候笑留可被下候他日補正を加へ度存じ居候へ共老來根氣漸く消耗の上に徒に多事いつの日にか實施致し得べきや心細きことに候不取敢書中御禮旁々右申述候 草々拜具

五月十六日

享拜

上野仁兄 坐右

この手紙の日付五月十六日の前日即ち五月十五日は先生の還曆誕生日に當ります。京都の知友諸君が先生誕生日の夜先生

を木屋町某旗亭にお招きして先生のために祝杯を擧げたのです。私も倅いその席末に列して皆さんと一處に先生の壽を祝うことの出来たのはまことに忘れがたい喜びであり本懐至極でありました。それについて先生から却って鄭重な御禮狀をいたゞき重ね／＼恐縮した次第であります。先生亡きあと今日これをよみますと更らに感慨深いものがあります。その上御手紙にある通りこの御禮狀と共に先生編著の満和辭典を頂戴しました。私はこれは何より難有い、これさえあれば滿洲語の勉強が出来るといふ氣になつて中學生が英語の字引をもつた以上に喜んだことを思出します。それと申しますのは、私も先生と同じく昭和十七年が還暦の年に當りますので、これを記念に何か一つ古い言葉を勉強しようと考え滿洲語をやりたいことを先生に申出でました。先生も賛成して下され已に前年に三田村先生を滿語の先生として御紹介していたゞきました。しかし大戦開始の時局も時局ですが、私の怠慢からレギュラーの滿語勉強がのび／＼になつてゐるところへこの満和辭典をいたゞきました。喜んだと同時にグズ／＼していられなくなり、メーレンドルフの滿文文法とノートをもつて週に一度京都の三田村先生のところへ通うようになりました。滿語勉強の傍ら三田村先生から中國の歴史の話を聞くことの出来たのは私の大きな楽しみでありました。こうして大戦の中をヒマを見ては三田村先生のところへ通ううちに十七年もくれ、あけて十八年の二月、いつもの通り三田村先生のところへ出ますと羽田先生からの御好意によつて今西先生對譯の滿洲實錄をいたゞきました。更らに四月には大清歴朝實錄の第一帙を羽田先生が自身でわざ／＼もつて來ていたゞきました。この中には滿文滿字の滿洲實錄八卷が含まれています。これをいたゞいた私は非常な興味を覺えて五月から七月末へかけて滿字の滿洲實錄八卷を全部ローマ字譯しました。しかしこれほど羽田先生と三田村先生によつてかきたられた私の滿語熱も三田村先生が京都を去つて宇治山田の大學へ勤務され、つゞいて應召出征されたので中絶の形となり、三田村先生が終戦後無事歸還された後もそのまゝ今日に及んでいます。羽田先生、三田村先生に申譯ないと思つています。ことに羽田先生の亡くなられた今日になつてみますと、先生から好意をこめていたゞいた滿和辭典と對譯滿洲實錄と滿字滿洲實錄の三部がむなしく机邊に残っています。先生は遠い遠いところへ去られ感謝のもつてゆきどころがなく、先生に

對する感謝と追憶の念がこも／＼深くなるばかりで、私獨り愴然たるものがあります。謹んで先生の御冥福を祈ります。

郷里の人々の語る羽田先生

徳 田 廣 太 郎

羽田先生が亡くなられた。先生の學者として又教育者としての偉大な御業績については到底私の語れる所ではありません。たまたま先生と郷里を同じくする私が先輩から聞いたいくつかの話題を記して先生を偲ぶよすがとしたいと思います。

昭和三十年六月五日

徳田廣太郎

田舎では風呂をわかすと近所に知らせて互に入りに行ったり來たりした。そうして種々話がはずむ。これがラジオもなく映畫もない田舎の唯一の娛樂であった。

ある晩一人の小父さんが來て、

「わしは此の間京都に行って電車に乗ったら羽田さんによく似た人が乗った。確かに羽田さんに違いないと思つて顔を見とつたがわしは紺のバチをはいているし、京都は廣いから似た人もあるうし、どうせわからないと思つたら、『××君じゃないか』と言われた。やっぱり羽田さんだった。人は皆顔を見るし、わしはあんな困ったことはなかった。まあ見なれ、普通の人ならたとえ知っていても大勢の前であんな風しているわしに聲かけるもんはおらんで、やっぱり羽田さんは違うは。」

山に囲まれた三十戸そこ／＼の村では毎日見る人の顔も變らねば話も「やまびこ」のように同じことが繰返される。誰かが京都に行って来たということはそれ自身重大ニュースである。まして××が羽田先生にあって来た等となれば、その話は何回か波に乗って私の耳に入る。更に批評まで加わった。

「××さんは『あんな困ったことはなかった』というが、『あんな嬉しかったことはなかった。』ということである。」と。

○
義兄が来た。最初の話に、

「羽田先生が文化勳章をもらわれて、その報告のため墓参された。特に分校の先生を知る人達が集まって先生を囲んだ。そのとき昔小使をしていた小父さんが『羽田さん。わしはあんだとこゝで一しよに寝たことがあるが覚えとんなるか。わしはあんだが日本一の勳章をもらいなってこんな嬉しいことはない。何か御祝にあげたいけど貧乏でなんにもない。あんだにあげようと思って大成のわさびをとって来て持って来たでじやまになつたらほかしてもえゝでポケットに入れておくれ。』と行ってポケットに突込んだ。先生は思わずポタ／＼と涙を落され、しばらく感慨に耽つておられた。そこに居合せたものも皆涙を落した。」

と。私もそれを聞いて涙を止めることができず、古い小さい校舎、併し雑巾で顔が寫る程みがかれ、支那の聖賢の圖が一杯に掲げてあった傳統ある教室を思い浮べた。同じ學校とはこんなに有難いものである。

羽田先生の魅力

佐藤長

師弟の關係と云うものは不思議なものである。若し私が羽田先生の講述に列ならず、先生の御仕事を手傳うようなことがなかったならば、私はこうも先生を「こわい先生」とは感じなかったであろう。昭和十年から私は先生の教を受けたが、「こわい先生」と言う感じは年月と共に深まり、なるべく先生のもとでは長居は無用と考えるようになった。先生の書かれたものを讀むたびに、先生に研究の状況を聞かれるたびに、私は漸次やりきれない重壓を感じだした。しかし先生に對する畏敬の念は私のみに特に甚しかったわけではない。當時の京大の研究室にいられる諸氏は等しく先生に對しては「こわい先生」の感を持っていられたようである。私は卒業して研究室に入ったが、これらの多くの俊才からはその一人一人に恐るべき先輩としての感を與えられた。所がその恐るべき先輩たちが又羽田先生を非常に「こわい先生」としていたのである。後輩ほど先輩のこわさを知らされるとすれば末輩の私が先生に最大のこわさを感じたのは當然であろう。いはゞ私は加上説的に先生にこわさを感じたのであって、それは私に於てその極に達したと言えるのである。師弟の關係と言うものは不思議なものである。私以後の、先生に教を受けない後輩たちは先生にこわさを殆ど感じないが如くである。とすれば先生をこわがることは私のクラスにおいて極まり、私のクラスにおいて終ったのであろう。

しかし講義であれ、談話であれ先生が談られるとき、その明快な論旨と沈着な態度に魅せられ、私はよくその炯々たる眼光をしばし見入ったものである。そういう場合の先生の悠揚せまらざる態度には言葉に表し得ない無限の魅力を感じしめるものがあった。先生は仕事の上での談話では殆ど笑顔を見せられなかった。しかし雑談の際先生の嫣然とされたときの眼元はたとえようない美しさをたゞえたものであった。昭和十七年の眞夏、總長室の北側の部屋で先生は珍しく和服に袴をつけて書類を點検しておられた。私は當時御手傳いした先生の仕事が完成したのでその詳細な報告に出頭した。私の報告が終ったとき、先生は「御苦勞だったね」と言つてにこやかに微笑されたが、その魅力的な御顔は今でも昨日の出來事のように私の眼前に髣髴する。思えばあの頃が先生の最も御元氣な時であったのであろう。先生の眼を思い出す限り私は先生に對する親愛の情を抑えることはできない。深い畏敬の念と共に親愛の情は今以て油然として私の胸に湧き起る

のである。「叱られてもよい。もっと先生に御會いし先生の御話を伺うべきだった。」これが先生の亡られた後、先生を思い出すたびに必ず起る私の後悔めいた氣持である。

羽田先生を偲んで

今 西 春 秋

最近彙文堂君が亡父のことを「羽田先生と共に學位を取られたことが新聞に載った」と冊府に書いているが、これは私の中學時代のことだ。こんなことやら、それに父も折々先生のことを口にしたように、先生の御名前だけはたしかに田舎の中學に居た頃から知っていた。しかし始めて先生にお目にかゝったのは三高に入學した年だった。ちようと父と一緒に家を出ようとしていると、りゅつとした着流しに二重マントといういでたちでお出でになって「パ、の所はいゝかね」と仰言った。ミヤコの先生というものは様子といゝ、言葉といゝハイカラなものだと感心した印象が今に忘れられない。三高時代それきりあまりお目にかゝらなかつた。しかし折に父をお訪ね下さつて隣の部屋で「ワハ、アハ、」と面白そうにやっていられたことなど覚えてゐる。

大學に入って先生についたが、實は私は先生の學科というものは丸で勉強しなかつた。病氣をしたりしたせいもあつたが殆ど學校には出ないで遊び呆けた。入學の年のことだつたと思うが、試験になつて「羽田先生の講義はとても覚えきれるもんでないからマケテもらおうじゃないか」ということに級議一決した、はいゝが外山なぞ自信のある連中はこんなと

きの交渉代表にはならない。「今西やってこい」と弱いところを掴まれて煽てあげられ恐る恐る先生の研究室に伺った。「先生今度の試験まけて下さい」「まげよとは何だね」「つまり試験範囲を縮小するとかノート持参を認めて頂くとか」「よろしいノートでも何でも持って来給え。」

これで鬼の首でも取ったつもりで、試験場でノートをひっくり返せば何とかなるくらいのもりでやって行ったのだから、さて其場できざとなって見るとあの先生のノートが分るものじゃない。あんまり出来なかったので問題もさっぱり覚えていないが、天山南北路のさかいもはっきりしないで唸ってしまったことだけ今に忘れられない。これが私一人のことなら、坊主ももう大學に入った手前うっかり口外ならないのだが、外山・三田村等々の輩に至るまでベルが鳴ってもまだ未練がましく机に嚙りついてたような始末だから書き留めておくに憚らない。だがしかしこれでも及第さして頂いたのだから先生はたしかに寛大だった。先生も御自身の講義がわれ／＼には難物であることを承知になっていたのかも知れない。

卒業前に先生の研究室で寫眞を撮らして頂いた。今の三五ミリヤレフでパチリとやるような簡単なものじゃない。三脚を立て、赤い風呂敷を冠つても、二三十分もかゝろうというしろものを擔ぎこんだのだが、先生はお若い時分にあの何千枚という満文老權の撮影をこの式でおやりになった経験がおありになる。それで御諒解下さったのだろうと思うが、珍しく御機嫌よく「うん撮ってもらおう。これでいゝかね」など、御自分で二三のポーズをさえ作って下さった。先達って七七忌の折、明君から見せて頂いた先生の數々の御寫眞の中にこれがあって、ひどくなつかしい思いをした。この寫眞だけは私が先生に捧げることの出来た唯一つの傑作だと思ふ。

卒業してから一年半ばかり瓶原の内藤先生の御膝下で三田村と一緒に修養させて頂いたが、内藤先生が御逝くなりにな

だったので、今度は羽田先生の満和辭典の編纂をお手傳いさせて頂くことになった。そしてちようとその頃「東洋史研究」を出そうという話が持ち上った。これについて羽田先生は、「若い君達がやるからには君達のためになるような新しい性格を持つたものでなければいけない。今の學界に足りないものは紹介批判だ。雜誌論文でも單行本でもどしどし紹介すると同時に嚴正な批判と活潑な討論を起して學界の整理清掃をやらなければいけない。論文などは抜きにしてもいゝ、外にいくらでも發表機關はある。こういうこと専門の雜誌にしてはどうか」との御意見だった。内藤戊申君と私とが主として編纂に當つたが、不學のやから、結局先生の御指導方針は幾何も具現出來ないでしまった。しかし私は今でもこういう雜誌があつたらたしかに便利だし、いゝことだと考へている。

この雜誌を始めるとき先生に表紙の題字をお願いしたのだが、なか／＼書いて頂けない。創刊號は殆ど組み上つたのだが表紙だけが出来ない。お宅に伺つたところ先生は「書いて見たが氣に入らないから」とのお話だ。とう／＼私は「先生ほんとに書いて頂けたのでしょうか」と失禮なことを申し上げてしまった。はたして「君、失敬なことを言うね、見せてやろう」と持つて來られたのは巻紙に「東洋史研究」と十餘りも書いてくしゃ／＼にまるめられたものだ。「この通り書いて屠籠に投げ込んであつたのだ。よく見給え。」私は大いに恐縮したが同時に腹が決つた。「先生、これはどの字を頂いても申し分ありませんが、如何でしょう。この中で先生のお氣に入つた字を採つて頂いて、それを組み合わせましたら。」「申し分ないなど、君に字が分るか。」「いや、悪い字は分りませんが良い字は分ります。先生、この字などは申し分ない中にも申し分ありません。」腹が決まると相當なことが言えるもんだ。とう／＼先生が動いて下さつた。「そうか、どれ／＼。うん待てよ。これとこれか。……。」「そうです。それとそれ。」「待て待て。これとも一つこちらだな。」「はい、なるほど。それとも一つそちらと。」「黙つて待ち給え。うん、やっぱりこの東洋とこちらの史研究を繋ぐか。」「そうです。そうです。それがやっぱり一番いゝと思います。」「とう／＼成功した。ついでにその巻紙全部頂いて歸ろうと思つたら、先生自身鉢と糊とを持つて來られて、「君なそにつながせては駄目だからな」とつなぎ合わせて御渡し下さつた。持ち歸つて火熨斗をか

けて芽出度く表紙は出来上った。

○

満和辭典の編纂が始まるとしんそこ先生が恐くなった。大體私は先生の學問というものを勉強したことがなくて、だもんでほんとの先生の偉さというものが分らなくて、いわば、「盲蛇に怖じず」といった形で先生に近づいていたのだが、辭典の編纂が始まって、びし〜と誤譯の指摘や文字の訂正をされ出すと、しんに恐れ入った。なるほど先生はお若い時分に内藤先生と共に滿洲に渡って滿文老檔の撮影調査をなさったり、五體清文鑑の研究をなさったこともある、しかし滿洲史滿洲語は決して先生の御専門ではない。私ははじめて先生の計り知れない御造詣の前に頭を垂れた。當時のことは今もなお目の前に浮び出るようだ。あの先生の御性格だから私共、三田村・藤枝それに私と三人で下書きする原稿を隅々まで全く一字残さず句讀點に至るまで目をお通しになるのだ。今度はかりはと思つた原稿にも朱がついて來なかつたことは恐らく一度もなかつたであろう。しかも先生の御校閲の方が恐しいスピードで私共は全く追い廻されるばかりだつた。それは全くあの先生の細いおからだの何處にひそむエネルギーであるかを訝からしめた。辭典編纂は今の宮崎先生の研究室で、矢野先生がお使いになっていた大きな机を占領して、このへんのところなか〜いゝ氣なものだつたが、少しでも原稿が遅れると、コツコツヌ〜と先生が現われられる。深呼吸する間も何もあらばこそ、三人椅子から飛び上つて萎え縮むばかりであつた。先生は又學校からの歸りがけよく南の窓の方に廻つて外からステッキでコツ〜と窓を打たれた。もちろん怠慢の御叱責だ。昔から目早い藤枝が、「そらお出でだ」といち早く先生の御姿を發見して臍の下に力をこめるだけの暇を與えてくれることもあつたが、不用意のさいの痛棒はたしかにこたえた。

辭典の印刷が一わたり終つたとき先生から凡例を書いて來いとのことで、今度こそ一項目一字と雖も手拔るものかと沈思黙考、二頁そこ〜のものを一週間あまりかゝつて作つて行つたのだが、やはり先生から一項目入れて頂かなければおさまりがつかない様なことだつた。それから又辭典の扉を考へて來いとのことで、滿洲字を入れようと思ひ、清文鑑の字

を模寫したがどうもうまく行かない。とう／＼邪道を思い立ってペン字の大書きを赤刷りにした。先生は笑ってよかろうと仰言ったが、年が経つにつれてそのきざつばさは鼻持ちがならなくなった。しかし私はついにこれを先生に御詫する機会を得ないでしまった。

○
昭和十三年北京留學に發つたが、しかしこれがまた先生から言つて頂いたようなものではない。上野留學資金がその年は史學科の方に廻つて来る筈だと何處かで聞き込んで厚顔しくも自ら立候補して満文老檔をたねに先生の所へつめかけたのである。先生なか／＼うんと仰言らない。元來私は肺病ケがあつてその頃も少々發熱が續いていたのだが、ついに先生は、「君のからだのことを案じているのだ。大學病院のM君と府立醫大のE君とに紹介狀を書いてやるから、どちらでもいい、よろしいと言つたらやつてやろう」と仰言る。私はE先生が父と懇意だったことを思い出してこの方をお訪ねすると丁寧に診察して下さい、行つてもいゝとも悪いともそんなことは言えんとのお話だ。私は大いに困つて、羽田先生には是非大丈夫だと言つて頂きたいと再三お願いしたが最後まではつきりは承諾されず、うつ／＼とした氣持で引き上げた。しかし二三日して羽田先生の所へ出かけて、「E先生は大丈夫だと仰言っています」と申し上げると、先生はにやりとされて、「うんまあそんなことらしい。やつてやろう。」恐らくE先生が何もかもぶちまけられたのだろうと思うが、肝に銘じて感激したのは先生のこうまで細かい御心遣いである。

○
北京に行つてからも折々先生の御手紙を頂くことが出來た。何時の御手紙にも必ず「御母堂も御健在の趣云々」と母についてお書添え下さったことは格別忘れられないことである。敗戦直後まわりの空氣に脅かされて一切の書きものと共に先生の御手紙も皆焼いてしまった。返す返すも残念なことをした。

一九四九年中國全土の解放後は新疆省天山南北路方面にもどし／＼自動車交通路や航空路が開けて哈密西瓜や干葡萄

(米國ものなぞ足もとにも及ばない)なども北京の店頭に山と積まれる有様。五〇年北京から西北訪問團の一行が發つて行つたときには私も滿洲字の團旗一本を書かされたりするなど、かつて先生の講義を聞いていた時分には地球の果にあるように考えていた所も、もう目と鼻のさきにあるのだという實感がひし／＼と迫つて來た。そこで私も是非一度出掛かけて昔の不勉強をせめてこんな所で償いたいもの、あわよくば歸國の上の先生えのお土産話自慢話にまでも持つて行きたいもの、更にあわよくばもう一度先生をお迎えしてあの大天山山脈を眼下に見下してゆう／＼と天翔りたいもの等々果ない夢を楽しむようになっていた。もう一度というのは昭和十三年、羽田、原田、村田三先生に小野君と私とがお伴して包頭まで旅行したからだ。その時旅のお疲れて羽田先生は張家口の旅館で朝早く胃痙攣を起された。先生は醫者なぞ呼んでも駄目だ、用意のはぶ茶があるからそれを煎じて出してくれと仰言るのだが、朝早くで宿はまだ誰一人起きていない。やと女中部屋を探してしふる一人を起して火を作つて貰つたが、その間一時間ばかり、汗を流してお苦しみになる先生と台所との間をあっちにうろ／＼こっちにうろ／＼全くとまどつてしまった。さいわいはぶ茶をお飲みになるとうそ見たいにけろりとお治りになつたが、今度の天山行には再びかようなヘマはしまい——など、たゞもう夢は楽しかつたのだ。身は忽ち累囚の辱を受け凡てはうたかたの泡と消え失せようなどそれこそ夢にさえ思い及ばなかつたことだ。

○

一九五一年秋北京軍事法廷の初回取調べの時のことである。審訊員「どうして北京へ來たか。」「京大からの留學生として來た。」「派遣の責任者は誰か。」「羽田亨先生である。」「それは何者か。」「京大教授、後の總長。」「彼の専門は何か。」「東洋史。」「もっと詳しく言え。」「西域史。」「よろしい、さすがはお前の頭目だ。日本帝國主義が早くからこの方面を睨つていたことは皆分つとる。羽田の本職は何か。」「言つた通り、京大教授……。」「とほけるな、それは表看板だ。」「……。」「彼はどこの大學に居たのか。」「京都大學。」「何ッ。」「京都大學だ。」「言えないだろう。京都帝國大學だ。日本帝國主義教育の元締だ。」「……。」「彼はスパイの大頭目だ。何機關に屬したか、それを言うんだ。」「スパイなどは思いもよらん。世

界に知られた學者だ。北京大學でも清華でも燕京でも何處でも問い合わせて見るがいゝ。」言うな、お前の指圖は受けん。白狀しなければしないでよろしい。どうしたらこゝが出られるかは分つてゐるだろう。」

これは格別低脳な審訊員で、幸い再びこんなにはめぐり合わさなかつたが、さりとして笑つて過ごせる話ではない。この憤滿は羽田先生に申し上げて晴らすより外ないと思つてゐたのだが、これ亦ついにその機を得ないでしまった。

○
どうやら生きて歸りつゝいた去年の十月、京都驛に降りたつた途端、私は實に思いがけなくも羽田先生の御出迎えを受けてゐたのだつた。「よかつた」と御一言。萬感胸に迫つた私は何を申し上げたのか覺えてゐない。しかもこれが先生の御姿を拜し御聲を聞くことの出來た最後だつたのだ。

引揚寮に入つて三四日後、ようやく寸暇を見つけて先生の所へ御挨拶に伺いたいと思ひ、藤枝に電話で御都合を伺つて貰つたら、「何をまだこんな所にぐず／＼してゐるのか。お母さんがどんなにお待ちかねか。すぐさま國へ歸れ」との御言葉。私は即刻一切の用件をほつておいて母の許へ歸つた。それから二週間後母は腦溢血で倒れた。母の病臥中、そして亡くなつた時、先生から頂いたお手紙は私の終生忘れることの出來ないものである。それは何れも先生御自體の御病苦をおしてお認め下さつたものである。しかしそれは少しも平素にお變りないあの流れるような御筆蹟である。——私はたゞ先生の御全快の近きを信するばかりであつた。

○
先生を評して「恐い先生だつた」という。それはたしかにそれにちがひない。宮崎先生は、あの恐さは先生が持たれた弱さを矯めようとし強くなろう強くなろうと努められた、その現われだと言われたが、私としてはたゞ恐さを鼓と感じ、そしてその中に滿ち溢れた情味といおうか、人間味といおうか、そうしたものをひし／＼と感じないではいられなかつたのである。先生がどんなに鼓を固めようとなされても、それはなお鼓を突き破つて出たのだ。宮崎先生が弱さとお感じに

なったのもこれであろう。しかしそれはしんに慈父のふところにも似たあたゝかさや安らかさを感じるものであった。先生の學問の偉大さはもちろんはかり知れないものである。しかし私がそれにもまして年とともに思ったのは先生の人間としての偉大さだった。先生があゝの恐さにもかゝわらず萬人の信賴と敬愛とを勝ち得られたのは、全くあの先生独自の人間性のしからしめたものであろう。

永い永い年月、私は決して先生のよき弟子ではなかった。幾度か歸國せよと言って頂いてもついに我を張って従わなかった。それにもまして私は先生に誓った研究すら一切を放擲して歸國しなければならぬ始末だった。しかも先生は凡てを忘れたゞ一言「よかった」と無限の慈愛をこめてお迎え取り下さったのだ。最後の御病苦中なお私一身のことについてまでどれほどの御心遣いを頂いたことか。——先生の御なきがらに對したとき私はどうにも泣けてきて仕方なかった。恥しかったので、しばらく出口に立って涙をおさえて外に出た。

羽田先生の思い出

慶 松 光 雄

あの廣い法經一番教室に滿ち溢れた學生に多大の感銘を與えた法科全教官告別の場も過ぎ、そろ／＼學生に對する彈壓の手がはげしくなり、さしも大學・學問・眞理擁護への全學的な學生の熱情をたぎらせた瀧川事件も悲しむべき結末への見通しが感ぜられるようになった昭和八年六月末の或る日、上加茂御自宅の應接間、卒業を來春に控えた東洋史專攻生（邦人十、中國人二）の代表として、某君起草し某君清書する所の文書を手交し、恐惶先生の御託宣を待つ學生二名。先生のはゝがびく／＼けいれんし暫く言葉が言葉にならない。おっかないので有名な先生があれ程カンを立てられたこともめ

ったにあるまいと今に推し測られる程である。尤も文書の内容というのが「私ども東洋史三回生は、むなしく法科教官を總辭職せしめこれを傍觀する文學部教授の授業をボイコットするという學部學生大會の決議に同調し、こゝにうやうやしく先生の御授業をも辭退致します」という代物で、而もそれを當時文學部長として事件の解決に苦慮して居られたと思われる先生の手許に奉ったのだから激怒の程も無理からずという次第。併し乍ら結局、お前達の立場もあらうということ、残る一學期最後の演習だけは先生の方からとり止めて下さるといってお計いを承り、重い使者の役目もどうかはたすことを得た。扇を持たれた手と頬がいゝ合せたようにけいれんし、激しい怒りを激しい言葉に現わすまいと努めて居られる先生の横顔が未だに浮ぶようである。

おのすからなる威嚴、かみそりの刃のようなするどさ、そういったものが奥に退いて、むしろ崇高なもの、温いもの、なつかしいものとしての先生がいつも心の中に存在するようになったのは、少くとも私にとっては戦後のことである。生意氣な云い分ではあるが、先生もその頃から幾分お變りになったのではあるまいか。年に一度か二度京都でお目にかゝれるのは大變うれしく、しみじみとした餘韻をいつまでも感ぜられることでもあった。

金澤で朝刊を見て一路上加茂へはせつけ、やっと御出棺をお見送り出來たのはせめてもの思いである。「最も不肖の弟子として散々御心配をおかけし、多大の御世話になりました。殊に先生から學問を始め大きな尊いものをいたゞいたことに對し幾重にも〱御禮申上げます。御高恩に對し何一つむくいることも出來ず何んとも申譯けございません」御棺の前で心からそう申上げた。その夜、京都驛への車中で大きなさゝえを失った空虚感と恩人の死毎に感ずる自己の不甲斐なさに對するやり切れぬ思いを又しても深くした。それが今に、否、末永く通ずる私の心でもある。

羽田先生を憶う

岩 井 大 慧

私が先生を知ったのは何時からだか想い出せない。併し學問的恩恵を受けたのは、大正五年拾二月「藝文」七ノ二號に載った「北方民族の間に於ける巫に就いて」という論文を讀ませて頂いたことに始まる。これが私をしてシャマニズム研究に進ましめた動機の一つであったことはいなめない。それから最も親しくして頂くようになったのは、御令嗣明君が東都に御遊學になられ、そのお宿をお命じ頂いたことよつてである。そうした御縁で先生も道代夫人も綾子令嬢も茅屋にお越し頂くこととなり、私も上洛すれば田尻町のお邸に泊めて頂き、親しくいろいろ御話を承るといふ關係になつた。

先生は元來そのないお方であられたから、恐らく逸話らしいものは、何處へ行かれても残されてはおられまいと思う。京都の方々によく伺う話であるが、どうも先生の前に出るとこわくつて話も碌々出來ないということである。私などは直接受業の徒でないからであるかも知れないが、決してそんなにこわいと感ずるようなことはなかつた氣さえする。それは御令嗣をお預りした間の先生のお手紙や、お言葉から感じた私の氣持では、非常にやさしい良きパパであつたことを想出す。これは私事で恐入るが、先生が小宅に駕を枉げられた時のことである。昭和七年のお正月だつたと豚娘慧和子（當時十一才）が言う。『私がうちの門の前でお友達と羽子をついていたら和服で長く袴を穿いた小父様が外套から手を出して「お羽子ですか、小父さんもつきましようか」と言われたことを今だに印象に残っている』と申していることでも、先生のおやさしい一面が知れよう。これも亦或は誰れも知らないことかもしれない。山妻の學友で先生の巴里留學時代にあらにいた某夫人が、或る日訪ねて來たときに、明君をお預りしているところから談偶々先生のことと及んだときに、「あれではの先生巴里にいらつした時は、ダンスをなさつて、とてもお上手だつたのよ」という話であつたと聞いたことを記憶している。今と違つてその頃に、さようなことをたしなんでおられたことは、あのシックなスタイルのお若い時のダン

丕姿を想い浮べると、微苦笑を禁ずることができない。

先生が私の勤めている東洋文庫の爲に終始御費心下さったことは、どんなに感謝してよいかその表現の方法を見出せない程である。先生の御熱心な態度がこの程漸く實を結んで、今年度豫算に於いて新規機關補助費を頂けるようになったことを御報告申上げてお欣び頂こうという時に當って、今や先生は私共と幽明境を異にするということとなり、私共は暗然悲境に陥つて了ったことは、返えず返えずも残念至極と言わざるを得ない。

羽田さん

黒田源次

此頃はとんと記憶力が駄目になったので、どうして羽田さんの知遇を受けるようになったか、それが何時だったか中々思ひ出せない。今西、濱田、羽田三氏を並べて考えると、やはり羽田さんが一番遅かった事は確である。何しろ専攻が違ふのだから接觸の機會が少かつたのは已むを得ない。それが隙りと稍親しくなつたのは昭和も十年を過ぎ日滿文化協會ができてからである。協會には私も大分厄介をかけたが、創立の際はまだ獨乙に居たので其間の事情は能くは知らない。然し内藤先生が最も骨を折られたらしい。私が昭和九年の春既に病臥中であつた先生を瓶原に訪ねた際、先生は「自分が行かねば出來ぬ仕事いろいろある」と申され、大きな計畫を有つておられた事が分る。間もなく先生が歿せられたので自然その後を繼がれたのが羽田先生である。言わば日滿文化協會の京都側の代表者と言つたような位置に自ら立たるゝようになつたわけで、此事は遼金史や蒙古の研究などの點から最適任者を得たことは言うまでもない。先生が田村、小川、外山、若城諸君を率いて赤峰烏丹城などを廻られたのも其頃であり、慶陵の調査に就て種々意見を交換したことも忘れるこ

とは出来ない。然し濱田博士存命中はやはり彫武者としてその背後に韜晦するといった傾向はあった。

私が満洲から引揚げ、殊に奈良に来るようになってから一層知遇を受けるようになったことは言うまでもない。何か厄介な問題があると直ぐに先生の所に話を持ち込んだものである。博物館の評議員になって貰ったのも先生の廣汎な良識を活用して貰う爲であった。尚上野直昭君が東博をやめて後任に羽田さんの喚聲が高かった際、同氏から會いたいということで一寸勧めてみた事もある。手堅い氏のことであるから遂に腰を上げられなかったが、今となってはやはり思い出の一つである。

こういうと批評めいて甚だ烏滸がましいが、實は羽田さんの姿は私の眼には年を追うて大きく映じて來た感があるのである。内藤さん狩野さん濱田さんなどの在世時はその蔭に唵喞しておられたのが、諸先生の隠退や殞落によって自然表面に立たれるようになり、しかもそういう老先生達の面影さえも羽田さんの光背の中に攝取されて依然光輝を放っていたという感じである。それかといって老先生達の有たれなかつた機鋒も具わっていた。之は羽田さんの人格の力と言おうか、或は圓熟と言おうか。まことに惜しい先生であった。

羽田博士の思い出

原 田 淑 人

羽田さんは私の一年前の東洋史學の先輩であつて、いつも一緒に白鳥先生のお講義を拜聴していた。しかし羽田さんは卒業後すぐに京都に歸られて大學院に入學されたので、東京在學中の羽田さんの思い出としては、たゞその笑顔ぐらいが印象に残っているだけである。

その後私はよく濱田さんとその教室にお尋ねすると、大抵羽田さんもそこにやって來られるし、又羽田さんをお尋ねすると、きつと濱田さんがやって來られて話込むのが常であった。或日話が京大總長荒木寅三郎先生の事に及んだ。その頃京大文學部に新たに野球のチームが設けられたが、荒木總長は羽田さんにその様子を問われて、ピッチャーは誰か、キャッチャーは誰か、そこまではよかつたが、次にバッターは誰かといわれたそうで、羽田さんは大笑いをされた。すると濱田さんは膝を叩いて、それこそ總長の眞價だと激賞された。元來總長には二つの型がある。一つは稜々として寸分の隙を與えない人と、も一つは要領をつかんで細事にこだわらない人である。失禮な言いかたかも知れぬが、羽田さんは前者であり、濱田さんは後者であつて、共に稀に見る名總長であつた。羽田總長が事務官から報告を受けられる際にはいつもの笑顔は忽ち緊張の色につままれて、一言一句も無駄には聽かれなかつたようである。私はこれでこそ萬事が好都合に運ぶのだなと敬服したのである。

私は何度か濱田さんとも羽田さんとも大陸を一緒に旅行した。羽田さんは濱田さんと異つて何かと事務的に片付けてゆかれて、實をいうとあまり面白くはなかつた。しかし羽田さんがお弟子さんを引立てる熱心さは——勿論濱田さんと同じだが——旅行中にも滿洲などに關するお弟子さんの論文の抜刷を行く先き先きに置かれていった。私にはお弟子さん達の大著が後來次ぎから次へと世に送られたのも故あるかなとうなずかれるのである。

世界東洋史界の權威羽田博士を失つたことは返えすがえすも遺憾であるが、舊友としての羽田さんの逝かれたことは私にとつて誠に寂寥の感に堪えないものがある。

羽田先生の思い出

今 石 二 三 雄

御快癒を祈っていた先生は遂に逝かれた。三月末上洛の際久方ぶりに拜顔し度いと思ひ乍ら御病狀容易ならぬ爲それも叶わず誠に心残りの事であった。六年間に互つて御側近くに居た事として先生の御影像は深く身に沁みているにも不拘、さて先生の横顔をと言う事になるとこれは案外むつかしい。先生は逸話に富む御方ではなかった。學識以外のあらゆる要素をもことごとく調和して具備せられていた爲か、所謂學者の中にあり勝な奇事奇行等はかつて感じた事がない。

學生として我々が感じた事は先ず先生の鋭さであった。然し先生の鋭さは御研究や講義の上では常に發揮されたにも不拘、日常學生に對する際にはそれ程ではなかった。只何等かの機會に、それも當然それを必要とする様な場合には屢々その片鱗を發揮された。ともかく學生三年間の感想は「嚴格で一寸近寄り難い」と言つたものであった。ところが卒業して研究室に勤務する様になり、教壇以外での先生との接觸の機會が擴大するに隨ひ、學生當時の感想は段々變化を來した。先生の暖い人間味が次第に大きく感得されて來はじめてのである。當時桑原先生や内藤先生は御老年ではあり、研究室の運営についての面は實質的に殆んど先生が當つて居られたが、色々の面で隨分行届いた配慮をして居られた様に思う。

當時元總長荒木寅三郎先生が逝去され、先生はその記念出版物の御世話を引き受けられた爲、私も千本丸太町西入の先生御舊宅に再三御邪魔して校正の御手傳いをしたが、御私宅で夜間先生から諄々として承つた色々な御話は今に至るも忘れ得ないところである。その時電燈の眞下で先生の指の爪に損傷のある事にはじめて氣がつき、これはどうなさつたのかと不遠慮に御尋ねした記憶があるが、はからずもこれが先生の晩年の御健康に係しようとは夢想だにせなかつた事である。

羽田先生の思い出

若 城 久 治 郎

先生が何事によらず、キチンとして居られたことは知っている人も多いと思うが、私の一番印象に残っているのは、御亡くなりになる一ヶ月前の三月初めに、先生の御入院をきいて取りあえず御見舞に伺った時のことである。やすんで居られるだろうと思つて御部屋の前まで行つてみると、ドアが少し開いていて何かして居られた奥様がこちらを御向きになつた。御辭儀をすると「どうぞ御入り……」と云われる。フト見たら思いがけなくも先生が椅子に腰かけて、小さい鏡をみながら髭を剃つて居られた。シーンと靜まり返つた朝の空氣の中で剃刀の音だけが聞えてくる。御機嫌好し、とホツとしながら御見舞を申し上げ、奥様から御容態を伺うと、今朝は大部氣分が好いらしく髭を剃つて居られる由であつた。剃り終えられると、フツと大きく吐息して離された右手に、剃刀が丁度ぶら下つた様に感じて、どうも重たげなのが氣がかりだつた。御疲れの御様子ながら此の分なら又回復されるだろうと思ひ、その中にもう一度御見舞をと思ひながら、とうとう御伺い出来ぬまゝになつて了つて甚だ恐縮に堪えない。最後の機會になつた其の時の僅かの御言葉と、髭剃りの音、了えられた時の御様子が、よく頭に残つて印象されている。先生は御病氣の時でもこの様にされる位だから、平生不精髭など云うことは一度も御經驗なかつたかと思ふ。服装その他も大體そうだったので、すべてキチンと整頓されていた。だから研究室を不精にして叱られたことも度々あつた。先生の御日常の生活方針が——また自然それが學問の研究態度にも現われていると思ふが——誠に俣ばれる次第である。

羽田先生の一言

大 島 利 一

羽田先生についての想い出をひとつ。

昭和八年の春、私が三回生になって、卒業論文のことで先生に呼ばれた時のことです。私は股代から戦國に至る間の經濟の發達を商業の面から述べてみたいというプランを申し上げました。すると先生は題目のことなど二三質問された後、「甲骨文字は讀めるかね」といわれました。その時の私は、甲骨文字は讀めないまゝに、専ら王國維・郭沫若氏の著書や、小島祐馬博士の研究などによってまとめようとしていたのですから、この一言は身にこたえました。今にして思えば、この一言は先生の御學風をよく現わしているように思います。こういう想い出を記すことはあまりないと思いますので、ついでと申しては失禮ですが、記しておきたいことは、この卒論の審査の時のことです。陪審として私の論文の審査に立會われた小島博士から、あまり他人の説に拘われず、自説を打ち出すように努めなければいけないという意味の、これも私にとっては手痛い御注意をうけました。これはおそらく私の論文に博士の説がそのまま引用されていたためだと思いますが、やはり如何にも博士らしい一言ではないでしょうか。おもえば羽田先生のいわれた原資料の尊重ということ、小島博士のいわれた自説の創造ということが學問の研究でもっとも大切なことのように思われます。この二つのことを私は學問に志したはじめに、こういうかたちで教えられたのですが、その後の私の歩みはこの教えとは、まことにほど遠いものでした。今、先生のなくなられた昭和三十年の今、私は、もう手遅れか、今からでも遅くないか、そういう場に立っているように思います。たしかに、明日では遅すぎるのですから。

先生の想い出を借りて、私はあまりに自分のことを語りすぎたでしょうか。おゆるしねがいます。

恩師羽田亨博士をしのびて

内 田 吟 風

羽田先生は講義や會話中よく英語をまぜられたが、其中でも論文の構成等について屢々 concrete という語を用いられたのは、入學した初の私には耳新しく印象的であった。その後「九姓回鶻と Toquz Oruz との關係を論ず」等の論作に親しむにつれて、成程と會得することができた。然し當時學生の私には、先生としては寧ろ大膽な筆致のものと思われる。「漠北の地と康國人」にひかれるものが大きく、少からず塞外史に對する興味をかき立てられた。

私が先生とはじめて親しく言葉をかわしたのも、二回生の時、研究室に居ると、たまたま先生が入って來られたので、この「漠北の地と康國人」について二三の愚問を呈した時が最初のように憶えている。(尤も入學直後、父の手紙を持って先生の部屋に挨拶に伺ったことはあったが、古い三高教授であった父は、三高生時代からの羽田先生を存上げていた様であった。) 學生時代から私は住宅關係から研究室を比較的よく利用したため、自然先生と接觸する機會も早く又屢々あった。私の獨逸文學志望を廢して東洋史を撰んだ心境を知られた先生は、歐米論文の閲讀をすゝめられた。先生のお言葉に従って *Orientalische Lektüre* の購讀を初めたのも其頃からであった。學生時代から個人的指導を受け得たのは眞に幸であった。先生の演習に *F. v. Richtofen* の著述を課せられて「China」の大冊と取組んだのもこんな事情からであったと思う。卒業論文の題目「安史の亂に關する研究」も先生にお尋ねしてきめた。この時先生は特に塞外人の活躍を中心に觀察することをすゝめられたが、これはなるべく中國乃至漢文明との連關において塞外史を探究して行こうとされた先生平素からの御意向からの様であった。然し卒業後の私は青年客氣一途に遊牧民族其物の歴史とか部族機構の究明に打込んだ。先生は概して吾々門下生の論文に對しては、殆ど口に出してこれと云う批評を加えられなかったように思う。少くとも私の場合にはそうであった。然し常に深い注意と溫い理解をもって激勵して下さったことは、其等の研究が更に一層成長する様に

と吾々教室員の研究生活や研究環境の爲に實に並々なぬ配慮を次々と下さったことが證して餘りあった。

先生の學恩の深きをおもうにつけても残念なことは、先生が苦心習得されたソグド語の傳受を受け得なかつたことだ。一二度先生は我々二三人にこれを約されたが、其後次々と顯職に就かれた爲に遂に其機を失したのである。勿論、私共の押と熱心の足らなかつたせいでもある。近時歐洲におけるビザンチノチュルキカ乃至西トルキスタン史研究に *Sogdisch* 文献利用の盛なるを見るにつけ残念ひとしおのものがある。眼に浮ぶのは、顯官忙職時代の晩年の先生ではなく、突厥碑文の掛軸を背に熱心に仕事せられていた壯年時代の先生である。思出はつきぬが、はや定めぬ字數を超えたので筆をおく。

羽田先生の思い出

三 田 村 泰 助

今はなき先生からは卒業以來二十餘年間、公私にわたって深き師恩を辱うした。同窓の外山君と折にふれ、恩師の健在はそのこと自体が何としても幸福だと語り合つたのだが、なくなられて見ると、改めて精神的支柱を失つた空虚をしみじみ感じる。敗戦の翌年ビルマから歸還して先生にお目にかゝり、學業廢止を申出てその非を諷されたのであったが、先生のお骨折で一昨年暮「滿蒙史料」の再出版が實現することゝなった。その節先生と共に感慨をもって長い年月を回顧したが、今では夢のやうな氣がする。

この「滿蒙史料」には思い出が多い。明實錄より滿蒙史料を抄録する仕事は卒業と同時に今西君と二人に命ぜられたものであるが、このことからからはからずも當時瓶原に隱栖されて居た故内藤湖南先生に師事することゝなった。文化といへば西歐文化しかなくと思つて居た私にシナ文化のよさを教へられたのはこの時であつたが、一代の學匠に接する機會を與え

て頂いたのは故先生のお陰であった。思えば先生の御指導によって、貧しい私は色々な面を知ることが出来た。その一に筆寫の件がある。史料を毛筆で寫すことを命ぜられ、大いに閉口したが、それ以來世に書道なるものがあること、内藤先生が有名な書家であり、故先生が得難き達筆であることを知った次第である。うかつな話であった。内藤先生が京都市に歸つたが、爾後先生の下で仕事を続け、その間京大本實錄の杜撰を具申して東都に遊び史料考訂の目やすを得ることが出来た。ついで滿和辭典の編纂に携わつたが、この時も一見廻り道のような仕事だが他日役に立つと諭された。果して仕事が終わつた後、平常待望して居た滿文老檔の翻譯を我等に與えて下さつた。誠に先生の門弟に對する學問への設計の周到さを感じられる。それは同時に嚴格さを伴う。今でも思い出すが老檔の翻譯が一段落した時、その試問が眞夏の午後の總長室で行われた。卒論の時は二十分で済んだが、この時は二時間にわたり一語一句あやしい點はようしやなく審され、漸く「うん」とたつた一言許しが出た時は、暑さと冷汗でほう／＼の態で引下つたものであった。

「滿蒙史料」の出版が先生の配慮で杉村勇造氏の手を通じて日滿文化協會から出ることになり、その整理を命ぜられた。内藤先生が滿蒙叢書の一に豫定されてから始めて陽の目を見た譯であるが、當時戰爭の進展は次々と若い協力者を驅り立て、やがて私もこの厄を免れることは出来なかつた。後事は今の内田神大教授が果されることになつたが、それ以後長い從軍と敗戦とに凡ては忘却の彼方におかれた。今度再出版に當り、過去を思い出すのは霧の中を手さぐりするようなものであった。田村教授からこの原稿が幾度か防空壕に入り、その決死の配慮により無事生きながらえたいきさつをかされ、學問擁護の情熱と眞摯が、敗戦の混亂の後だけに一見奇異にひゞき又胸あたゝまるの思いがした。久々で陳列館通いをし、同教授や新進の俊才達の絶大な協力を得て着々刊行が實現されるに至つた。奇しき廻り會わせに今以つて時々本當か知らんと思う。然しこれが故先生の私への最後の御指導であつたと今にして思う。昨年田村教授の配慮で樂友會館に先生を圍み、折よく上落された杉村氏や又間野君以下の協力者と會食した。元氣にあふれた先生の潤達なお話を拜聽し眞に愉快な然も貴重な一刻を過ぎたが、これが先生との歡談の最後となつた。史料集の完成を見ずに逝かれた先生を悼むと同

時に、餘り柔順な弟子でなかっただけに師を追慕するの情切々たるものがある。

故名譽教授羽田公評

吉川幸次郎

私は羽田先生とは専門の分野を同じくしない。しかし先生がすぐれた學者であることを、私は知っていると信じる。先生の主著、「西域文化史」を私は二度讀んだが、それは私のごとくその方面とは縁遠いものをして、頁のすみすみにまでわたって首肯させ、何の澁滞をも残さぬ書物であった。また近ごろの業績としてことに私が感心したのは、平凡社の世界美術全集のために書かれた「隋唐時代の文化」である。そこでも先生最も得意の部分は、音楽、曆法、宗教など、周邊文化の影響を受けた事象についての章であろうが、經學、文學に關する章も、同様にあふなげがない。ことに李杜の詩が南北文學の統一であるとする説、晚唐文學が修辭主義への逆行であるとする説、ともに鈍根私のごときは、その方面を専門としながら、近ごろやっとその認識に到達したのであるが、それらがこゝではあっさり指摘されている。いかにして先生がこの見解を得られたか、たゞしたく思いながら、ついにその機を得なかつたのこそ、残念である。なお私ごとで恐縮であるが、私の「漢の武帝」を最も賞識されたのは、先生であった。知己の感をなさざるを得ない。

しかし究竟に於いて、私は先生から學問そのものについて教えを受けたことは少く、接觸は主として他の面に於いてであった。ことに昭和のはじめ先生が中國の學者と頻繁に文通されたころ、戰時中、先生が東方文化研究所長であり、私がその所員であつたころ、また晩年、東方學會設立の相談にあつたころ、接觸はもっともしばしばであつた。

そうした接觸を通じ、先生の性格の表皮として、まず強く印象されるのは、思慮の周密さであり、瑣事をおろそかにさ

れぬことであつた。軽い氣持でお願ひしたことを、こちらはもはや忘れてゐるのに、先生はちゃんとおぼえておられ、赤面したこと、一再でない。病院で最後にお目にかゝったときも、一葉の葉書を示され、その處置を托されたが、葉書の内容は、一人の東方學會會員が、住所の變更を通知したものであつた。

かく瑣事をゆるがせにされぬ一面、決斷ははやく、あざやかであつた。こうつと、と首をひねられ、うん、と決斷される。美しいスピードがあつた。慎重は、このスピードを生むためであつた。

慎重と果斷とのこうした平衡が、先生を行政家として令名あらしめると共に、「西域文化史」をはじめとするその歴史叙述の明快通暢さを生んだと思われるが、相矛盾するごとく見える二つのものの、共通の基盤となるものを考えるとすれば、それは清潔な闘志というべきものでなかつたか。果斷が闘志の所産であること、いうまでもない。瑣事をゆるがせにせぬこと、それこそ實證的な學者の闘志の表現でなければならぬ。満員電車の中で、理不盡におして來る暴漢を、ぐっと押し返される先生を見て、私は驚歎したことがある。若いころの先生は政治家を志し、新聞記者を志されたことがあると聞く。西域史というあまり人のやらない困難な分野を開拓されたのも、白鳥博士の影響と共に、闘志のせいではなかつたか。また私が大正の末、大學へはいり、はじめて先生を廊下で見かけたときは、俊敏そのもののごとくであるとともに、その健康に憂いあるごとく感じたが、晩年、何度かの大患をのりこえつゝ、七十四の壽を得られたのも、闘志と無關係でないかも知れぬ。なお先生は白鳥博士に對しては、先生の稱呼を用いられたが、内藤、狩野、桑原の諸博士は、さんと呼ばれ、先生を以て呼ばれたことは、私の知るかぎり一度もなかつた。

陳壽の三國志をひもとくと、吳志の人物は、魏書の人物とことなつて、みな何か英特の氣がある。建安の末年、江表の地に於ける吳帝國の創業と、明治の末年、關西の地に於ける京都大學の創業とは、對立する勢力を意識しつゝ、新しい土地に新しい勢力を締造した點で、似かよつた點があるであろう。先生は關西人であり、明治四十年東大を卒業すると共に、京大の大学院にはいられたといへば、創業の際に於ける最年少のスタッフであり、やがて東洋史學第二代の棟梁となられ

た。周瑜、魯肅、張昭にあたる初代諸老先生の英特の氣は、時に過度にロマンチックな表現をとることがあり、従って行
政は必ずしもお得意でなかった。ところが先生はそうでなかった。且その表現はいつもきちんとしていた。陸抗が諸葛恪
と衛戍地を交換したとき、舊任地の一切をきちんと整頓してひきわたしたというようところがあつた。それと共に陸抗
は敵將羊祜のくれた藥を平氣でのむという大度の人物でもあつた。陳壽は、陸抗を目して、貞亮籌幹、誠實で堅實で計畫
と實行性に富む人物と評している。或いは移して先生の評となし得るかも知れない。

先生のこわざと暖かさ

安 部 健 夫

羽田先生といへば、一般的には「こわい先生」「氣づまりな先生」で定評があつたらしい。

これについては有名な、それこそ有名な傳説がある。何かの用で是非とも先生にお會いせねばならなくなつたひと
頃の學生たちは、御部屋の前立ちどまって深ぶかかと一呼吸、また一呼吸、氣持ちをおちつけ頭をしすめてからで
ないとノックする氣になれなかつたというのがそれだ。あながち學生ばかりがそうであつたわけではない。物おじ・人見
しりからは凡そ縁のおそろな新聞記者諸君にしてから、まさかに深呼吸こそしなかつたかも知れぬが、やはり相應窮屈
な思いをしていたらしいことは、子供のための某紙上に、短いながらも心あたたまる先生の追悼記をかいたH氏の筆の端
からも察することができた。一般的にいうかぎり、先生が「こわい」「氣づまり」な印象を相手に與えやすかつたのは否み
ようもあるまい。じじつ、論理的で、きちょうめんで、むだなことの嫌いな先生の御性格——要するに「すき」のなさは、
すきだらけの普通の人にとって苦が手でないはずは有りえなかつたのである。

にもかゝわらず私は、わたし自身も幸いその一人のだが、先生に何度となく叱られ、やりこめられ、「すき」を衝かれながらも、いっこうに「こわく」も「氣づまり」にも思つてこなかった多くの人々、とくに弟子たちのあることを知っている。これは一体どうしたわけなのであろう。

わけは色々あるかも知れない。しかしその根本的なものはやはり、一應の「こわさ」や「氣づまり」を越えて感じとられる、先生自身のもつておられた人間的な「暖かさ」のせいであつたと見ねばならない。「暖かさ」への甘えからであつたと考えねばならない。それにしてもどんな暖さが？ もちろん、人と人との關係において何を暖かく感じるかは相對的なものである。人によつて違つていてもよく、また事實ちがつてゐるわけだが、わたし自身は先生が、その弟子たちに對してかつて「武士は食わねど」の封建哲學の實踐を強いられることなく、いつでも、また陰に陽に、かれらの生活の保證に氣をくばり、ときには積極的にその哲學の愚を説いてくらしの道を世話され、その點、明治・大正期の古い型の學者のたれかれとはひどく違つておられたことのうちに、何ともいえない人間的な暖かさを感じてきたのである。

同じ感じ方をされる方もおそらく少なくはあるまい。

羽田先生の思いで

日 比 野 丈 夫

わたくしが大學に入ったころは、わが家運のもっとも非なるときであつた。在學中に母を失つた。せめてもの幸いといへば、腦溢血をわずらつて久しい父が、人の手からないで歩けるぐらいのことであつた。専攻のことで先生のお宅へ御挨拶に行くと、「東洋史なんかやつたら困りますよ」と父を顧みていわれた。思えばそのときから随分お世話になつてきた

ものである。

教室での先生はやはり何となくこわかった。漢文のなかにでも一つとして不必要な文字はない、一字一字ていねいに讀まねばならぬことを教えられた。これだけは一生の間忘れないようにしたいと思っっている。

結婚をして家内をつれてうかがったのは、丁度先生が總長に再任されて間もないころであった。先生がまた總長になって下さって、わたくしども弟子は肩身が廣いですという、「ウーム」といってギョロリと一つ眼をむかれた。

一昨年秋のことである。先生の晩年ではもっともお元氣なときであった。わたくしどもの母校である京都一中と、その後身である洛北高校との同窓會が合併し、文化勳章にかゝやく誇るべき先輩として、先生と湯川さんが記念講演をされた。聞き手は大部分が終戦後卒業の若い人々であった。先生は學生時代を日清戦争から北清事變をへて日露戦争のすむまで、殺伐たる時世にくらし、泊りがけの修學旅行にまで銃をかついで行った話もされ、いかにも歴史家にふさわしい冷静な態度で、世の移り變りをじゅんじゅんと説いておられた。わたくしは、いまさらのように先生の教育家としての一面を發見するとともに、先生の學問のつよいしんのあるところにふれることができたように思った。先生がたえず日本の東洋學を世界の學問にしようと努力してこられたのは、學問の道によってのみ日本の存在を世界に示しうることを確信しておられたからであり、このことを若き世代に知らそうとしていられることが、はっきりとわかつたのである。

羽田先生の追憶

宮 崎 市 定

のだが、羽田先生の東大在學時代（明治四十年頃）にはなかなかの稀觀書で、閲覽できるのは上野圖書館藏の一部だけであつた。先生は同學と毎朝、先を争つて上野へ駆けつけては借り出してノートされたそうである。同書の附録についている西域地圖を先生が丹念に繪具を用いて、原圖と殆んど違わない位精密に筆寫されたものを、私の學生時代に見せて貰つたことがあるが、令息明君に何うと、明君はそういうものは見たことがない、というお返事であつた。私も眞似をして寫してみたことがあるが、この方はずっと出來が悪い。原書を手に入れると、その寫しもいつしか亡くなつてしまつた。

先生は白鳥博士の學問にいたく傾倒された。先生が文化勳章を授與されるために宮中へ參内されたが、すぐその歸途、車を驅つて白鳥博士の墓前に詣でて報告されたことは學界の佳話である。先生は白鳥博士の講義が面白くて待ち遠しく、もし休講にでもなると、それはがっかりしたものだと話された。これは先生もよかつたが、學生もまたそれに劣らず良かったせいであろう。私は不肖の學生で、ついそんな經驗もなく、従つて教師になつてからもついぞ、そんな講義をした覚えがない。先生に對してひたすら恥じ入る次第である。

羽田先生と東洋史談話會

森

鹿

三

東洋史談話會が誕生したのは昭和二年、私の二回生の時のことで、同窓の田村君らと相談して産婆役をつとめたのである。當時三回生には安部・貝塚・小竹・浦・今石ら十名にあまる諸君がいて、それまで専攻者の少かつた東洋史學科も盛況を呈するに至つた。そこで國史の讀史會や西洋史の讀書會に倣つて、東洋史も學會をもつことを計畫した次第である。早速、田村君と一緒に關係の諸先生を歴訪することになり、内藤・桑原・矢野・今西諸先生のお宅へうかゞつて、御認可

頂き激励や注意を受けた。たゞ羽田先生だけは、御出張か何かの都合で、お願いに行くのが少し遅れたように思う。ともかく田村君とともに、先生の研究室にうかがって、談話會發足の趣旨を申し上げた處、靜かに聞いておられたが、なかなかお返事がない。もう申上げることが一通り言ってしまったので、間のふさぎようもない。ききたゞしもされないから、くりかえして申上げることがも憚られるので、全くどうにもならない羽目に陥ってしまった。結局、永い沈黙のあとOKをもらつた時は、ほんとうにほっとした感じであつた。しかしOKを與えられたあとは、こんどは具體的な問題を次々に訊問されるのには、また面喰らつた。われわれの不用意さに痛棒を加えられたわけであるが、これによって東洋史談話會は現實に誕生の機をえたのである。そして間もなく樂友會館の二階の一室で、發會式とともに最初の例會をもつことになつた。當夜は内藤・桑原・羽田の諸先生に小川琢治先生もお越し頂き、にぎにぎしく發足することができた。しかし研究發表に對する先生方、ことに羽田先生のあまりにも手痛い批評に恐れをなして、その後は、先生方に御案内しないことを條件にして發表を引受けるという有様で、暫く祕密會的存在になつたのは遺憾であつた。

その後は、折にふれて先生から談話會について下問されたが、本會と關連して、先生が東大在學中に東洋史談話會設立に奔走された話なども承つた。思えば、われわれが先生の研究室で間の悪い數十分をすごしていた時、先生はそれより二十年前の追想にふけておられたのかも知れない。そしてわれわれの用意の不備についても配慮をめぐらされていたのである。最初の例會におけるきびしい批評も（發表者にはお氣の毒であつたが）先生がわれわれに學會のあり方を示して下さつた御配慮と思われる。その後、自ら談話會での發表を申出られ、景教經典志玄安樂經についてのお話を拜聴したが、峯巖僧伽がシモン・ペテロであることを解かれたりなど、今も眼前に彷彿する。その時はわざわざ狩野先生を伴なわれてお見えになったが、このことも先生が平素から、われわれ東洋史の學生に中國文學・哲學の講義をきゝに行くことを奨励されていたことと思合せて、御配慮の程がしのばれるのである。談話會が大會をもつようになってからも、忙中の一刻をさいて會場に姿をあらわされた。先生が談話會に示された深い愛情を思うにつけても、私には計畫當初の、

あの沈黙の數十分が回想されるのである。

羽田先生の思い出

塚 本 善 隆

私が始めて先生の生徒になったのは、十七歳大正四年に中學を終えて嫌應なしに鹿ヶ谷にあった佛教専門學校に入られてから三年間である。既に佛教普通學を修めてきている四五歳から十以上も年上の同窓は法衣碩學巨匠の講ぜられる宗乘餘乘と呼ばれる主要科目をサッサとノートするが、私は黒板にかかれる字以外は何も解らず、さっぱり面白くない。そんな學僧方にまじってスマートな洋服でシャナリ、シャナリと身體をくねらせるようにして教室入ってくる貴公子然たる若い英語と歴史の先生が、最近ロシヤから歸られた京都大學の羽田先生である。英語はやっていない學生が多いので極めて易しい讀本である。私はあてられてもベラ／＼といけるし、試験の満點もヘッチャラである。横文字の屢々まじる歴史の講義も皆には苦手だが、私には只一つの面白くてよく解る講義である。西洋史も中學の時のとすっかり異っていて面白かったが、夏休みに偶然先生のネタと認められるフランス人（セーニョボー？）の西洋文明史の譯本を古本屋で見つけたので、聞きおとした所も先生の略された所も補って試験に書いてこれも九十點以上。佛教學で點のとれぬ私にとって、先生こそ進級の救主である。とびぬけてよい點をくれるから學科がすぎになり先生がすぎになった面もあるが、大たい京都地方の中學卒業生にとっては帝大の先生といえ、特別にえらく思われたものだ。いつも十分か二十分も遅れて人力車で来て、ゆっくり煙草と茶をのんで、三十分もすぎる頃にゆっくりと教室に入ってきて、サッサと講義をやって二十分も前にはやめて、法衣の老先生と談笑を楽しんでいる先生が、時間ギッシリ解らぬ講義で苦しませる僧正方よりも、世間に

超然としていてえらいとさえ感ぜられた。三學期のある日、授業をさぼって寮の一番奥でカルタをやり始めた時、ゆっくりした足音、障子があいた。また舍監の小言かと思つたら先生だ。「カルタか。僕も入れてくれ。」甚だ上手とは云えぬが、十枚ばかりの得意の札は、すばらしい勢と早さではねとばされた。授業時間中にカルタができる話せる先生。私は先生の學問の眞價も知らずに所謂ファンになつていたらしい。しかし最終年の先生の「佛教東漸史」という講義は、私を佛教史學への道へ決心させた。

二年間東京へ出て荻原、渡邊、望月、矢吹、椎尾等の諸先生（これらの先生は羽田先生も含めて京大諸先生の學問上の競争者でもあり論敵でもあつた）に佛教學をならつて歸京した私は、先生に、「十年ほどゆっくり勉強したいから京大の選科へ志願しますが」と相談すると、ニコニコして、「よかろう、しつかりやり給え」と勵まされた。近親のものは「京大へ行くのならよく賣れる英文學でもやれ」といつたが、意地張りの私は、「一番うれぬ科へ行きたい」と印度哲學を選び、東洋史に轉じ、選科のおかげで哲・史・文を通じてすきな講義をきいて廻つた。

門下生として一つ先生の親切な勧めにそむいたことがある。先生は何回か「學士試験をうけておき給え、就職に都合がよいから。」といわれた。その氣になつたこともあるが、さて大藏經を開いていると、こんなに讀む本があるのに、數學や法學や國文學をやつて學士でもあるまいとやめにした。先生には今年には家に用があつたので來年やりますなどと逃口上をいつていたが、實は私には私學の弱點とよさも、官學の優越とそのつまらなさも見えてきて、佛教學では官學なんぞと感じ出していたので、最後におそるおそる「官立學校なぞに就職の意志もなし、佛教史學に學士號はいりませんので……」と口はばつたことをいつたが、先生は「うん。よかろう」といわれただけで、それ以上は勧められなかった。だが、「大學の本が自由に利用できる職があつたら」と頼んだ無學士號の私を、官學機構の中で助手にし、研究所員におされた間に隨分御苦勞をかけたことだろうと、よく推察できるので、先生の末を思う親心にそむいてすまなかつた時に感ずる。

先生とはテニスも將棋もやつたが、速戰速進主義でカルタとよく似ている。確かに先生の性格の一面だが、しかし研究

には極めて深重あせらざるものがあつた。確か三回生の時だつたらう。ペリオから來た寫眞の燉煌佛典の斷簡を見せて、これは何か調べておいてくれ給えとのこと。早速大藏經を當り出したが、そう簡單に出てこぬ。一ヶ月もたつて「どうだ、解つたかね」「もう少ししまつて下さい。」「まああせらんでもよいよ」といわれたなり何のさい促もせられなかつた。隨分たつてやつと探しあてて大悦びに報告したら、「うん、有難う」といわれただけだつた。その後燉煌遺書にその解説が専門の佛教學者が書いたような而も一行も無駄のない簡にして充實したものになつていた。

先生と溫泉

田村實造

先生が逝かれて早や百日になる。いざ思い出の筆をとつてみると、いろいろのことが、つきからつきと走馬燈のように浮び上つてくるので、なにかから書き出してよいやらとまどつてしまふ。

それはまだ、さほど昔のことでもないような気がするのに、もう二十餘年もまえのことである。ちょうど滿洲國が成立してまもないころ滿洲國政府當局および關東軍文化部は、滿洲に關する文化の發揚・保護の立場から、その對策を當時京都帝國大學總長であつた新城新藏博士に求めたため、昭和七年五月、大學は先生と小西・矢野兩博士らと、奉天・新京・長春に派遣することになった。たまたま中國に留學中であつた僕もお伴を命ぜられ、先生と先發することになった。

われわれは、五月のはじめ神戸港を出航して海路大連についたが、當時軍・官・民の日本人でこつたがえす奉天に直行することを避け、熊岳城溫泉で一兩日想を練ることになった。そのころ滿鐵沿線では、大連から奉天までの間に、溫泉地として熊岳城と鞍山附近の湯崗子とが知られていたが、前者が野趣に富んで好ましかつた。

われわれは、途中金州に岩間氏を訪うなどして、熊岳城についたのは四、五時ごろでもあったろうか。宿につくと、先生は着がえもどかしげに浴室に急がれる。僕も温泉や風呂が好きな方では人後におちないつもりだが、空腹と疲れのため、入浴は食後にまわすことにする。やがて就寝前の九時過ぎ浴室に入ってみると湯ふねには誰か一人つかっているだけだ。眼鏡をはずしている上に、湯氣のせいで對手がわからずにいると、いきなり聲をかけられて、それが先生であることがわかって仰天したが、同時に温泉がお好きなのにもおどろいた。しかし、おどろきはそればかりではない。

翌日朝食後、たんぜん姿の先生のお伴をして、附近の河原を散歩したとき、五月のこととて、黄塵萬丈といわれる滿洲特有の颯風は、すでにおさまってはいたが、初夏の風は強く、二人の髪の毛を、さかさなでにかきみだすばかりであった。熊岳城では、河原のところどころに、砂湯と稱する小石をたんだ野天風呂が作られているのが特色であるが、われわれがそこまで行くと、とつぜん先生は「砂湯に入ろう。君も入らないか」といふつゝ、やにわに、たんぜんを河原に脱ぎずって砂湯にとびこまれた。

つね日ごろから、なにごとにも石橋をたゝいて渡る式の慎重な先生のこのような猪突的勇敢さを見て、僕はまったくあつげにとられたかたちであった。昨日からすでに三回、あるいは僕が知らぬまに、もう一回くらいは入っておられたかも知れないのに、よくよく温泉がお好きであったらしい。温泉を通じて、それまで知らなかった先生の他の一面をうかがわせてもらったような気がした。先生御自身にも、このときの砂湯は思い出深かった御様子で、よく折にふれては話し出されていた。御入院中も御見舞に伺うと、かたわらの奥様をかえりみて、熊岳城の砂湯の話しをなつかしげに語られながら、こんどよくなったら信州の温泉に行きたいが、どこがよいか知らないかなどと、しきりに尋ねられていたことを思い出すと、胸迫る思いがする。

熊岳城温泉の敷浴は、先生にあらたな生氣を注入したらしく、奉天・新京についた後も、終始御元氣で、滿洲國の文化建設のため幾多の創案を建言されたようである。たまたま奉天に御滞在在中の一日、五月十五日、例の五・一五事件による

大養首相の遭難が傳えられたが、先生は悲痛な顔をしながら「僕の誕生日に、えらいことを仕でかしたものだ」とつぶやいておられたことが、いまでも耳底に残っている。

羽田先生の思い出

増 村 宏

羽田先生に教室で接するのは、史學科の學生としての一回生の概説の時からのことだが、一、二回生の時の受講は人數も多いので、親しく接する氣持になるのは、やはり三回生になって同期の者だけの演習の時からであつたと思う。今の田村實造教授から、先生の演習は辛辣ですよと聞かされて恐れをなしたが、傳説のようにひどくやられた者はなかつた。學生の數だけ出された題目を各自選んで小エッセイを書いて出し、先生の尋問と批評を受けるのであつたが、その時間に次の當番者が提出すればよいのを、仲々出來なくて自宅に持参し、中には前日の夕方とゞけた者もあつて、諸君はそれでよいと思ふか知れぬが、一週間位前に出さないと困ると教室で注意されたのを覚えてゐる。

今、私の學校に社會學を擔當している同僚が、嘗つて先生が「耶律楚材曰く」という様な演習か講讀かしていられた時分に、特に許されて傍聴したのだという。その時先生が研究室に蒙古の符牒の寫眞がいろいろあるから見に来るように言われたが、「ノコノコ見に行つたのは、ワシだけだつたぜ、學生はチリノコしていたぜ」と言い言ひしている。私達も恐れていたことは事實である。

教室以外で先生に接するのは、各人違つた経験があろうが、次は同期の某君の場合である。某君は授業料を、親から貰つておいて使い込んだらしく、滞納して除名處分になり、自宅に行つて、今度東洋史専攻生になつた者だが、實はと事情

を話し、除名取消しの奔走を先生にお願いに及び、それで無事にすんだ。その時某君の依頼を初めて聞かれた先生は、啞然として、「それは君極めてレアなケースだね」と言われたという。

恐れている先生にまた各自いろいろのお骨折りをお願いをしたわけである。

羽田先生と東亞考古學

梅 原 末 治

大正三十年十月の或日、故富岡先生の御宅で、親しく露西亞での御土産話を傍聴した時から、お亡くなりになる丁度一ヶ月前、病院でお目にかゝった一時まで、故先生に師事した年月は四十年を超える。かくも永い間變らない指導を受けたのは稀有なことである。もとく先生の御専門の學問には何の素養もない私であつたにもかゝわらず、早く内藤・小川・狩野・瀧・富岡・濱田等諸先生にお伴して二樂莊に將來された西域出土品の拓本を作つたり、また當時京都に在住されていた羅振玉先生の許に出入した事などから、その方の遺物にも親しむようになった。そうして第一次の外遊後その本格的な指導を受けるまでになり、昭和十三年濱田先生が亡くなられてから先生の廣い學問上の識見よりして東亞考古學の面での其の仕事をつゞけて今日に至つたのである。

日本の東亞考古學は濱田先生に依つて一九一〇年代からはなばなく發足、朝鮮から滿洲、北支の一部を舞臺に世界の注目を惹く實地調査が行われたことであるが、一九三〇年代に入って、東亞の政治狀勢の惡化といろ／＼な内部的な問題もあつて、やゝ行きなやむことになつた。そこで此の時に濱田先生が長逝されたのである。ところでその後を承けて大局の上からこの學問の基礎的な行方に苦心を拂つて、自からその責に當られたのは外ならぬ羽田先生であつた。

日華事變に依つて外面的な中國學問への興味の高まつた當時にあって、此の種學問のまさにあゆむべき地道な基本調査の實施に對する新たな認識から、當時の學術振興會を動かして、一九四〇年にその實行機關たる第十五特別委員會をば第二常置委員會に設け、自から委員長の責に當つて、五ヶ年に亙る調査研究を立案された。原田・長谷部・池内・加藤・西田諸博士の協力に依る此の委員會の實際の仕事は東西二班に分れてその年から實行に入つて、先ず南滿洲の地區からはじめられた。一班は第一年度に長山列島の史前遺跡の調査、つゞいて翌年は四平山を中心とした積石塚の發掘を行い、第三年度にはそれに聯關した住居址を調査して、それ／＼成果を擧げたのである。殊に四平山での夥しい黑陶の發見が重要な收獲であつた。それと共に他の一班でも遼陽を中心とする漢代の壁畫墳の調査が行われた。併し引續いて實施される豫定だつた中國本土での殷墟を含む京漢沿線の一般調査其他は、戰爭の急迫に加えて、それが餘りにも學術的であると云うので、出先の軍部から不急の事業とされて、遂に行われないうで終戦を迎えることになつてしまつた。かくて敗戦に依る混亂で此の調査とその成果については、今日では關係者を除いて殆んど世に知られていない。先生は發足の當初からその結果の公刊を強調すると共に、豫めそれに對する調査に當つての用意をも定めて、それが實施を嚴に督勵せられた。私はこの間終始その實際に關與した一人としてそれを通じて先生の考古の學に就いての眞の造詣を深くも思うものである。他日彼の慶陵の調査のように、その結果が公にされる日が來るならば、それは東亞考古學の發達の上に一つの寄與となると共に、この面での先生の識見が知られるであらう。先生の長逝に際して弟子の一人としてその結果の報告に對する責を思う次第である。

哀詩一首

并引

那波利貞

京都大學名譽教授日本學士院會員京都市名譽市民羽田亨博士寢疾不瘳昭和三十歲次乙未四月壬辰朔十三日甲辰昏日遂捐館舍焉世壽七十有三在官三十三年遠近聞者皆惜之懷停飲龍杵之恩矣法諱曰文清院殿滴翠元亨大居士越五月壬戌朔十三日甲戌那顏日京都合城市民設祭壇於古洛東岡崎京都市公會堂樓上迎英魂而舉追悼仰慕禮式式卻梵唄木魚之音笙笛獻饌之儀又儼風簷十字架之備專創頌德景仰之新儀京都市

長高山義三君使余賦哀詩一首讀於靈前此巴調卽其詩也

東皇玉輅向西途。何底無情拉宿儒。不朽文功垂竹帛。无疆榮譽照桑榆。坤輿同學追勝淚。洛華闔城哀悼虞。歲歲春回魂永逝。願承冥福更操觚。

羽田先生の御遺影

田 中 克 巳

一九四六年、敗殘の祖國に私の齎したのは

北京の中國報で見た伯希和先生の長逝の報だった

上賀茂のお宅はまだ寒い頃で

先生は靜かに頷かれ黙っておいでだった

それから十年のいま先生御自身が逝かれた

あのころと違つて世間はおちついた

東洋學の第一人者としての先生の御寫眞は

靜かに頷かれ且微笑をたゝえて

學の前途を安堵して祝福しておいでのようなだ。

父を憶う

時野谷綾子

病院にて

骨と皮とただそれだけになり果てしからだをなおもさいなむ病魔か

病院より家路につく

父上の愛でしこの道加茂堤むくろ守りていま歸えるとわ

櫻にも心ありしよ加茂堤車の上に花ふりしきる

折りにふれて

かきつばた藤に山吹きさつき花夜をかざれり父いまさぬに

ちちのみの父いますがに仰ぎみる書齋の窓はとじて開かず

書齋へやぬちにあまたの藏書その中に黙るし父の姿はみえず

朝ごとに茶園歩きてそこばくの收穫持ちて笑みたまいしが

手作りの細成りさうり食はむ時は満面えみて言葉はずみぬ